－文 芸－

草の丘

創 刊 号

2011 年 11 月　印旛文学の会

文芸

草の丘　創刊号（二〇一一年十一月）

目次　草の丘　創刊号

《短編》
観覧車　香取　淳……一
《詩　三篇》
癇癪玉　中川とら……八
風と踊れば
わたしは　まいらない
《連載ＳＦファンタジー》
アプとズコ（ＡＰＰＵ　＆　ＺＵＫＫＯ）　香取　淳……一〇
《小説》
私が生きた街　唐瀬　光……二五

（写真　香取　淳　　カット　中川とら・唐瀬　光）

観覧車

香取　淳

一、

容子がホテルの自動ドアを潜ると、ロビーに立っていた長身の青年が笑顔で近づいてきた。彼女には忘れられない武夫の顔であるが、高校三年で別れたときよりずっと背が伸びている。容子も背が高くて、身長は百七十センチ近くもあるが、互いに歩み寄ると彼女の目の高さに武夫の顎があった。それに彼は外国暮らしが長いせいか、軽く着くずした服装も日本人離れがしている。

「容子さん、久しぶりですね。すごく綺麗になった！」

「まあ、お上手ね。武夫さんも立派になられて。それにしても、ずいぶん伸びたわね」

「うん、アメリカの大学に入ってから十センチも。まあ、ひとより成長が遅いっていうことかな」

「いいえ、大器晩成っていうこともありますわ」

武夫は笑顔でその言葉を受け止めながら、近くのエスカレーターに彼女を手招きした。そして、二階のコーヒーラウンジに容子を誘い、窓際の小さなテーブルを挟んで座った。

「やっぱり想像していたとおりだ。容子さんは高校時代と少しも変わっていないよ」

「え、それってどういうこと？」
「やさしく包まれているようで、一緒にいるとホッとする」
「まあ」
「あれは確か中二の秋だったよね、僕が父の転勤で、日本に初めて来たときは」
「そうね、変わった転校生だったから、よく覚えているわ」
「あのとき、親身になって相談できるのは容子さん、あなただけだった。家庭では日本語を話していたから、一応は話せたけど、友だち同士の微妙な会話なんて端から分からない。ずいぶん爪弾きにされたり虐められたりしたな」
「言葉や習慣が違う国で育った子が、すぐ日本の学校に馴染めるわけはないでしょう」
「でも、誰も解ってはくれなかったな」
「そうだったかしら」
「それに容子さんはその頃から大きくて、僕がワルたちに虐められそうになると体を張って守ってくれたよね」
「あら、恥ずかしい。でもあの頃って成長期の違いから女性のほうが大きいじゃない。だから仲良しの女の子たちとタッグを組んで、男なんかに負けないって、強がっていただけよ」

そう言って容子は冷めかけたコーヒーを一口啜った。
「高校も容子さんと同じところに入れてよかったな。難しい漢字や古文の解釈ではずいぶん教えてもらったよね」
「あら、私だって英語を沢山教わったわ。それもネイティブ・イングリッシュをね」
「話は変わるけど、ナースの仕事はどう？」
「ええ、苦労が多いけどやり甲斐はあるわよ。もう五年になるけど、いろいろな部門を廻ったな」
「へー、ナースの仕事っていろいろあるわけ？」
「そう、診療科別に外来と病棟、それに手術室や救急、ＩＣＵ。救急なんてもう戦場よ」
「すごくハードなんだ。それでいまは？」
「いまは希望がかなって小児病棟なの。Ｎ病院は重症が集まってくるから、小児癌や白血病、先天性の奇形では大脳がないような子もいるよ」
「大脳がないって、そんな！」
「信じられないと思うでしょ。でも現実にいるの。その子の頭の向こう側にね、ロウソクを置くと炎が透けて見えるわけ」
「それで、よく生きられるね」

「ベッドに寝たきりで目も見えないし耳も聞こえない。もちろん口もきけないけど感情はちゃんとあるのよ」
「何で？」
「その子の喜びや悲しみ、怒りなどがね、かすかな表情の変化だけど、毎日看ていると分かるんだ」
「ふーん、凄いな」
「小児病棟の子はみんな必死で生きようとしているの。その健気な姿がとっても可愛くって、容子は好きなわけ」
「そうか…、それじゃ一生ナースを続けるつもり？」
「そう、ナースは私にとって天職だから。体もこんなに大きいから力仕事だって男に負けないわよ」
　彼女はそう言って、握った拳を頬の両脇に挙げて、愛らしく胸を張った。
「ところで武夫さんはどんなお仕事？」
「ウン、大学院でＭＢＡを取得して、国連事務局に就職したところ。まだ駆け出しだけど、世界中どこにでも行けて面白いよ。今回はバングラディシュに来た帰りに日本に立ち寄ったんだけど、明日はニューヨークに戻らなければ…」
「そう、ゆっくりはできないのね」
「ウン、残念だけど。でも容子さんと会えて良かった」
　大きなガラス窓を覆うレースのカーテンが夕日に煌めいている。テーブルのコーヒーカップも片づけられて、氷の解けたグラスが二つテーブルに載っている。
「容子さん、今日はゆっくり出来るんでしょう？」
「ハイ、非番ですから」
「それだったらお台場に行こう、昔とはずいぶん変わったでしょ」
「ええ、いいわよ。容子も今夜は武夫さんと一緒にいたいから」

二、

　新橋駅からゆりかもめに乗り換え、青海（あおみ）で降りた二人は観覧車を待つ列に加わった。やがて順番が巡って来て、二人はゲートを入った。係の女性が記念撮影をしますから、と声をかけて二人を右手のコーナーに誘う。その係員に抗うこともなく、二人は大きく観覧車が描かれたボードの前に並び立った。大型のカメラをもった男が、ファインダーから目を離して、もっと近づいて、と大声をあげる。武夫は、その声に応えて容子との距離を縮め、右手を彼女の肩にそっと伸ばした。

フラッシュが焚かれ、撮影が済むと、二人はゆっくり回るゴンドラが連なっている乗り場に向かった。家族連れが降りたゴンドラに二人が乗り込む。側にいた係員がドアを閉めると、ゴンドラはプレートを離れて上昇を始めた。座席に並んで掛けた二人の前に、暗闇に浮き上がる色とりどりの明りが見えてきた。

「お台場の夜景って本当にきれいね」

「ウン、高校時代の友だちが訪ねてきたとき、東京に来たら必ず行ってアドバイスをくれたんだ」

「友達って、誰のこと？」

「ン、君もよく知っているSだよ。彼が先月学会でアメリカに来たとき、僕を訪ねてくれてね」

「そうなの、S君は今、うちの病院でインターンをしているわ。先輩の怖いドクターにビシビシ鍛えられて、日々成長中、というところかな」

「そのSがね、容子さんのことをすごく褒めていた。看護の知識や技量が抜群なうえに、どんな仕事でも嫌な顔ひとつしない。患者さんには優しくて親切、しかも美人だから若いドクターや検査技師たちの憧れの的だって」

「それは言い過ぎよ。私はただ、働くんだったら明るく元気で楽しそうに、って心掛けているだけよ」

「そこがね、中々できないことだと思うよ」

「そんな風に言ってもらえると、嬉しいわ」

「実を言うとね、Sの話を聞いているうちに中学や高校時代のことが目の前に浮かんできてね、どうしても容子さんに会いたくなって、それで日本に飛んで来たんだよ」

「そうなの。容子、とっても嬉しいわ」

しばらく会話が途切れた。突然、武夫は容子の左腕を手に取って、長袖のブラウスの裾を捲りあげた。容子は、その手を引こうとしたが武夫は離さない。

「容子さん、あなたはいつも明るく元気に装っているけれど、このリストカットは何ですか。数え切れないほどあるじゃないですか！」

「これはね、少女が罹る熱病みたいなものなの。本当に死ぬ気だったら脈を打っている動脈まで切らなければ…」

「でも、死のうとしたことは事実ですよね」

「ええ、中学から高校に掛けてとても辛いときがあったから。でもいまは遠い昔のお話、一過性の熱病みたいなものよ」

「何で容子はそんな強がりを言うの。辛かったら辛いって、苦しかったら苦しいって言ってください。僕は容子の力になりたい、容子と共

に苦しみを分かち合って生きたい」
「ありがとう…」
小声で答える容子を武夫は抱き寄せた。そのまま二人は固く抱き合い、唇を重ねた。

観覧車は高さを増して、お台場一帯の夜景を映し出し、都心部から新宿の高層ビル街、羽田空港とそこを離着陸する旅客機の明かりが見えた。
「僕は容子さんがこの世の中で一番好きです。日本を離れてからもずっとあなたのことを思い続けていました」
「武夫さん、嬉しいわ。私も同じ気持ちよ」
武夫は彼女のブラウスの胸を開(はだ)け、豊かな乳房に唇を這わせる。そして右手を容子の下半身に伸ばしスカートのファスナーに手を掛けた。その彼の手を容子は左手で強く抑えながら息絶え絶えに言った。
「いけないわ、ダメよ」
「なぜですか、僕たちは結婚するんですよ」
「でも駄目なの、結婚はできないの」
「何を言うのですか。僕たちはもう大人なんだから、誰も反対なんてできはしない」
「そうじゃないの。ただ結婚は、それだけは勘弁して」
「どうして、どうして駄目なの。その理由を教えて」
「ごめんなさい、それだけは言えません」
「そんな馬鹿な！　きっとほかにいい人が、将来を約束した人がいるんですね」
「ひどい！　そんなこと言わないで、そんなんじゃないわ」
武夫の手から力が抜けたとき、容子は彼を突き放してゴンドラの逆側の窓に身を寄せた。そして乱れたブラウスの前を合わせてボタンを嵌めはじめた。
やがてゴンドラは、乗りこんだときのプレートに帰ってきた。外に立つ二人の係員が扉を開ける。その扉から容子は身を屈めて走り出し、近くの階段を素早く駆け降りた。武夫も慌てて降りると、彼女の後を追いかける。しかし、夥しい客に紛れ込んだ容子の姿は見当たらない。彼女は女子トイレに逃げ込んで、両手で顔を覆って泣き崩れた。

三、

容子は涙が枯れて乾くまで、三十分近くトイレに入っていた。鏡の前で丁寧に化粧を直して、恐る恐る外に出る。幾分、人込みが減った周囲を見回してみるが、武夫の姿は見当たらない。ホッとする気持ちと、惜しいものを逃してしまった気持ちとが入り混じる中を、彼女は青海の駅に向かってとぼとぼと歩いた。

渋谷で電車を降りて、庸子は病院の職員宿舎に向かった。武夫から逃れるように走ったとき挫いた左足首が歩くたびにずきずき痛みだした。その足を引きずるように夜道を十分余り歩いて宿舎に辿りついた。

「また今日も大失敗だね、容子。私には恋なんてできないんだから…」

そう独り言を言いながら、彼女はブラウスやスカートを脱いでいく。

「男の人とは会っちゃいけないって、嫌というほど分かっているのに…。でも、武夫君は旧い友だちだから一緒にお酒を飲んで、楽しかった高校時代の話をしよう、なんて思ったのが甘かったな」

独り言を続けながら、彼女は全裸になって浴室に入った。湯加減を確かめて、胸のあたりからシャワーを浴びる。ホルモン療法で大きくなった乳房を掌で抱え上げて丁寧に洗い、温湯を下半身へ移していった。容子の鼠径部の左右にある小さな傷跡、それは十歳の時に脱腸と言われて手術をした跡である。そのときは何の疑いも抱かなかったが、中学を卒業しても彼女には初潮が来なかった。わずかに生えた陰毛とその下にある陰部は女の形をしていたが、母に連れられて診察を受けた産婦人科医は膣や子宮がないという。さらに大学病院の専門医から、彼女は自分が〈精巣性女性化症候群〉という病気であることを言い渡された。その専門医は、十歳の時に脱腸の診断で切り取られた鼠径部の膨らみは多分、精巣であったに違いないという。

容子はふくよかな女性となった身体を洗いながら、男でも女でもない自分がありのままに生きられる世界がこの世にあればいいなと心底から思った。そして濡れた体をバスタオルで拭いながら、鏡に移った自分をぼんやり眺めた。

《この世の中に人間なんていない、いるのは男か女のいずれかだ》そんなことを新聞や雑誌に書きたてる偉い先生が何人もいた。そして、世間の誰もが周囲の人を必ず男か女に区別している。口には出さないが、そう思っていることがよく分かる。だから、容子もいい女になり済まして生きていくことに心を決めている。しかし、容子のように、本当は女でもなければ男でもない人間が、この世の中にはたくさんいるようなのだ。彼ら彼女らは恥ずかしくて自分の本当の性を口に出しては言えない。そして、恋もセックスもできず、結婚も望めない。ま

して子供をもつことなんて夢のまた夢。
それでも容子は歯を食いしばって、じっと耐えて生きていこうと思う。
明日も病棟で看護する病気の子たち、恐らく大人にまで成長することすら望みの薄い幼い子たちが懸命に、必死に生きようとしているように。
　容子は鏡に写った自分に向かって「しっかりするんだぞ！」と声をかけて、その頬をぴしゃぴしゃと両手で叩いて微笑んだ。

〈了〉

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、主な活動として文芸「草の丘」を年に2回発行する。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する人とする。
・会員は、年会費三千円を負担する。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会の全員に諮って決するものとする。

癇癪玉

中川　とら

きょうのあなたの癇癪は
かたいかたい塊にし
ビュービュー冷たい北風に
力いっぱい　投げたらいい

おそらく
凄まじい勢いで
空高く高く飛んで行き
あの三角山のてっぺんに
粉々になって　落ちていく

あしたは
さっぱりお天気で
お山のてっぺん晴れわたり
ポカポカ　お日さま気持ちよく

一日　笑いが止まらない
きっと　笑いが止まらない

風と踊れば

そんなに　思い悩まないで
お気に入りのスカートをはいて
外へ出ましょう
そうよ
風といっしょに踊れば
きのうの不安も　遠ざかっていく

そんなに　悲しまないで
髪を洗って
外へ出ましょう
そうよ
風といっしょに踊れば
あしたの迷いも　空へ舞うわ

そんなに　失望しないで
爪を切って裸足で
外へ出ましょう
そうよ
風といっしょに踊れば
目標の光は　差し込んでくる

人生は
風の中で踊るようなもの
くるくると廻りながら
歌い出したくなるようなものよ

だから
そんなに　悲観しないで
さあ
風と一緒に踊りましょう

わたしは　まいらない

あなたが
わたしを利用し　苦しめようと算段しても
わたしは
けっしてまいらない

媚びて子分になるほど
わたしは
弱くも阿呆でもない

アプとズコ(Appu & Zukko)

香取　淳

1

パンパカパー　パッパッパッパンパカパー　パッパッパッ…

ファンファーレがスタジアムに高々と鳴り響き、出走ホサピ十六頭が次々とゲージに入っていきます。本日のメインイベント「十歳ホサピレース」は、競馬であればダービーに当たる若いホサピのデビュー戦であります。これから始まる5百メートルのホサピレースを、今か今かと固唾をのんで待つ観衆たちの甲高い声援で、スタジアムは一段と盛り上がってきました。

一周五百メートルのトラックを幾重にも取り巻くスタンドには隙間もなく観客が…、と申したいところでありますが、観客の姿は見えません。スタンドを隙間なく埋めているのは、ワインの醸造に用いられるような洋ダルだけであります。円筒の胴の部分が膨らんだプラスチックの洋ダルが、トラックのすぐ近くまでせり出したフィールドシートからアルプススタンドの天辺まで隙間なく並んでいます。しかし、その洋ダルをよく見ますと、その中に盛んにうごめく生物がいるようであります。

もう少し洋ダルに近づいてみましょう。洋ダルの上には、イカのような菱形の耳が衝立(ついたて)のように立ち、その前にタコのような丸坊主の頭

がのっかっているのが見えてきました。色は淡い肌色をしていますが、透明に近いために遠くからはその姿が見えなかったのです。眉毛はなく、丸い大きな二つの目は緑色で、真ん中が不気味に光っています。両目のすぐ下に筒状に飛び出している口は、タコそのものといってもいいでしょう。手は二本確認できますが、それらもタコと同じような吸盤で覆われています。タルから頭と手だけを出して観戦する姿は、ヤドカリによく似ていると云えましょう。彼らは、いつも二本の手を洋ダルの縁に掛けて、自らの体重を支えながら生活しているようです。

この洋ダルに身を納めて生きる生物はイカタック星人といって、いまから二百年ほど前に地球に移住してきた宇宙からの侵略者です。そのイカタック星人である観衆たちは興奮してきたのか、半透明であった顔を赤く染めて応援し始めました。

「アプ、アプー！　ズコ、ズコー！　アプー、ズコー」

どうやら本命と目されるホサピへの声援のようですが、アプとズコというホサピが大変な人気のようです。

それではアプとズコの方に目を向けてみましょう。出走ゲージに入っていく十六頭が見えてきました。紫色のシャツにショートパンツ姿のホサピたちの胸と背中には、色とりどりのゼッケンが付けられています。それら一六頭のホサピに、さらに近づきます。何と、出走するホサピたちとはまだ幼い人間の子たち、小学校四、五年生くらいの少年や少女ではありませんか！　先ほどから、実況アナウンサーは十六頭と表現していますが、イカタック星人から見れば、レースに駆り出された人間の子たちは家畜に過ぎないからなのであります。その少年少女のほぼ中央にＡＰＰＵとＺＵＫＫＯというゼッケンを付けたホサピが見えます。背の高さは百五十センチ前後で、アプという少女の方がズコという少年よりすこし高いようです。二頭は隣り合った狭いゲージに入って出走に備えていますが二、三のホサピがゲージに入ろうとしません。

出走係のイカタック星人が、甲高い声で注意をしても効き目がありません。出走係は洋ダルを素早く移動させてホサピたちに近づきます。そのときタルの下辺が何かに引っ掛かったのでしょうか、洋ダルがパタンと倒れて、中にいたイカタック星人が外に放り出されました。

タルから出たその姿はグロテスクで、首の下に吸盤に覆われた手が二本、洋ダル形に変形した短い胴には四本の長い足。それらの足もタコのような吸盤で覆われています。半透明の軟弱な体は地球の重力に押し潰され、動くたびにプルプルと震えています。それでも出走係は懸命に地を這って、ホサピたちに近づいていきます。

少年少女の前まで来た出走係は、鋭い金属音を口から出して注意します。すぐに二頭が出走ゲージに入りました。しかし、注意が理解できなかったのでしょうか、一頭が動こうとはしません。それを見たイカタック星人は怒ったのでしょう、全身をレンガ色に変えて素早くその少年の前に移動しました。背丈が七、八十センチの出走係は、細い二本の手をスルスルと天に伸ばして、少年の眼の前で紫の光線を点滅させます。その光線を見た少年は、怯えた表情でゲージに駆け込みました。

再びファンファーレが鳴り響き、ゲージの扉が一斉に開きました。少年と少女たちはゲージからとび出して、トラックを全力で走ります。しかし、彼らはひいき目に見ても速いとは申せません。その走りは幼児のレベルと云わざるを得ません。しかも、フォームは言葉を失うほどにひどいもので、身体が左右に揺れたり、首がぐるぐる回ったりしています。

頼りないランナー集団の中からスルスルと抜け出して、トップ争いを始めた少女と少年がいます。そうです、それがアプとズコ、出走前から評判の高かった二頭が後続の集団をどんどん引き離していくではありませんか。二頭は第三コーナー、そして第四コーナーを過ぎてホームストレッチに入りました。

「ズコが身体一つ前に出た。それを懸命に追うアプ、アプが懸命に追っていく！」

実況放送のアナウンサーの声が甲高く響き、スタンドの観衆は洋ダルの縁を太鼓のように激しく叩きます。ゴンゴン、ドンドン、さらには脳天に響く甲高い声、腹が震えるような低い声、それらが入り混じってスタジアムはもう手を付けられないような大騒ぎになっています。

「残り二十メートル、アプが並んだ、ズコと並び…、いまズコをかわす。ズコをかわして、そのままゴールイン。アプ、勝った、アプの勝ち。アプの優勝です！」

二頭がデッドヒートの末にゴールインすると、広いスタジアムは急に静まりかえってしまいました。しかし、残された一四頭のホサピはまだトラックを走っています。そのホサピたちは第三から第四コーナーにかけて長く伸び、先頭を走る少年がやっとホームストレッチに差し掛かろうとしています。彼らのたどたどしい走りに、一旦は静まり返ったスタンドからブーイングが起こります。

「ろくでもないホサピ、お前たちはレースに出る資格がない、ひっこめ、ひっこめ！」

罵声を浴びせるイカタック星人がいます。

「駄目ホサピ、駄目ホサピ、駄目ホサピだけど頑張れやー」

応援というより、冷やかしに似た掛け声も聞こえてきます。そうこうするうちに十四頭のホサピがみなゴールインして、十歳ホサピレースは終わりました。

トラックに隣接したウィナーズサークルでは、優勝したアプの記念撮影と表彰式が執り行われています。アプは係員に促されて、サークルの中央におずおずと立ちました。その右にはオーナーのパーリオ、左にはパーリオの屋敷でアプを鍛えた調教師が並び立って、と云ってもタルから顔と手だけを出した格好ですが、まずスナップ写真を撮影します。

次に、黄金色のタルに籠っていた競技委員長が、アプに近づいてきました。タルには性能の良いキャスターが付いているので自由に地面を移動できるのです。係員に促されて、アプは膝と腰を曲げて頭の位置を低くします。アプの頭に月桂樹の冠が、首にはきらびやかなレイが掛けられました。そして、オーナーのパーリオには莫大な賞金が贈られます。

左右からパーリオと飼育係の吸盤に覆われた手が伸びてきて、アプの両手を高々と持ち上げます。万歳をした格好で立ち上がったアプに、カメラのフラッシュがピカピカッと光ります。緊張していたアプは、何だか嬉しくなってニコニコ顔になりました。オーナーのパーリオも嬉しさのあまりに茹蛸（ゆでだこ）のように真っ赤です。そこでまたフラッシュがピカピカッと光ります。

その映像は遠目に見ると奇妙なもので、幾つも並んだ洋ダルの中に少女が一人立って、万歳をしているかのように映っていました。

2

ホサピレースがすべて終わって、洋ダルに籠った観客たちはヤドカリのように引き上げていきます。耳をふさぎたいほど騒がしかったスタジアムはシーンと静まり、隣の森から蝉の鳴き声がミーン、ミーンと聞こえてきました。レースを走り終えたホサピたちも、それぞれの飼い主が手配したトラックに載せられて、厩舎ならぬホサピ舎に戻っていきます。レースで優勝したアプも、ズコとともに専用トラックの荷台に載せられて、パーリオが住む屋敷に向かいました。

アプとズコが広い屋敷の中にあるホサピ舎に着くと、飼い主のパーリオとその妻のペクールが入口で待っていました。もちろん、夫妻も洋ダルから頭と手だけを出しての出迎えです。アプがトラックから降りると、夫妻はアプに駆け寄って背中やお尻をポンポン叩いて祝福し

ます。
「おめでとう、アプ！　よくやった。さすがにワシが手塩にかけて作った子だけのことはある。素晴らしいレースだったよ！」
妻のペクールも夫に負けないほど大きな声で褒めます。
「アプ、偉かったわね。ありがとう！　今日の賞金で、今までに掛かった元手は全部取り戻したわ。これからも大いに稼いでね、頼むわよ、アプ！」
ペクールはそう言いながら、ピンク色の吸盤に覆われた手を伸ばしてアプの頭を撫でています。その脇では、優勝を逃したズコがしょんぼり項垂れていました。
「おー、ズコ！　お前も速かったよ。アプとデッドヒートを演じたからレースがすごく盛り上がった。競技委員長もお前のことを褒めていたよ」
そう慰められてもズコの顔はくしゃくしゃで、今にも涙がこぼれそう。
「ズコ！　次のレースでは必ず勝てる。ワシが必ず勝てるようにしてやるから気を落とさずに練習すること、分かったな」
パーリオはそう言ってズコを励ますと、妻に何事かささやいて家に入っていきます。夫の言葉に小さく頷いたペクールは、アプとズコを食糧倉庫に連れて行き、機嫌のよい声で言いました。
「今日はご褒美に、ここにある食糧を思う存分に食べてもいいわよ。お前たちは利口なホサピだから、お腹を壊すまでは食べないでしょ。大丈夫よね」
アプとズコがコクリと頷くと、妻のペクールは洋ダルごとくるりと向きを変えて、家にスススッと戻って行きました。
アプとズコは大喜びで、ガラス張りの貯蔵庫の前に駆け寄ります。今まで見たこともない、おいしそうな料理が何十種類も並んでいます。食糧倉庫といってもイカタック星人たちのそれは出来上がった料理の貯蔵庫で、空腹時に料理を取り出して、それを温めたり冷やしたりして食べるのです。イカタック星人は手の先からいろいろな光線を出すことができるので、料理の加熱や冷却などは本当に「朝飯前」のことなのです。
アプとズコは、レストランのショーケースに似た貯蔵庫の中からローストビーフとロブスターを取り出しました。それを電子レンジに入れて、数分間温めます。えッ、イカタック星人の世界に電子レンジ？と思われる読者もおられることでしょう。しかし、彼らは日常生活では電子レンジを使っているのです。手の先から光線を出すことができても、そのためには多大なエネルギーを必要とします。光線を出した

ときには、へとへとに疲れますし、限度を超えると病気になったり死んでしまったりすることさえあるのです。ですから、イカタック星人は非常時や緊急時に限って、手の先から特殊光線を出すことにしているのです。

ローストビーフとロブスターを平らげたアプとズコは、次にハンバーグ、ピザ、餃子と手当たり次第にご馳走を食べまくりました。もうこれ以上は無理かなと思ったとき、別のケースにあったトロピカルフルーツを頬張ってみました。すると、甘くて爽やかな味のフルーツはスムーズに喉を通ってしまうのです。これは不思議と感じながら、彼等はさらにソフトクリームも食べたのです。

お腹が苦しくなったアプとズコは、床に仰向けに寝ころびました。両手を枕にして、アプが話し掛けます。

「私たち、普通のホサピではないようよ。ズコはどう思う?」

「うん、そうかもね」

「でしょう。 だけどね、パーリオ様がしつこく言うのよ。すべてのことは周囲のホサピをよく見て、その真似をするように、だって」

「僕もさ。空をぼんやり見上げて、ぽかんと口を開けていろ、だもんね」

「そんなことを?」

「僕は虫が好きだから、カブトムシやアリを見つけると自然に目がね、行ってしまう」

「じっと見ていると、叱られるわけ?」

「そう、普通のホサピはそんなものには興味を示さないッ、てね」

アプとズコは、青森県の下北半島にあるホサピ牧場で数百頭の仲間とともに飼育されました。幼い時から周りのホサピと仲良く遊びましたが、自分が仲間たちとは違うと思ったことは一度もありませんでした。ただ、駆けっこの速さや、いろいろな訓練の習得の早さが成長とともに違ってきましたが、それはホサピ個々の得手不得手の問題とされていましたし、アプとズコもそのように思っていました。しかし、最近は周りのホサピとの違いが目立つようになったので、気になって仕方がないのです。

それでは、アプやズコと同年代のホサピたちはどのように暮らしているのかを簡単にご紹介しましょう。彼らは十歳になっても相変わらず涎(よだれ)を流していて、鼻水が出たときは手でグイッと拭ったり、舌を伸ばしてペロリと嘗めたりします。彼らは食物以外には何ごとにも興味を示さず、イカタック星人の飼い主や調教師が命令を下さなければ、自ら進んで動くことは決してありません。およそ彼らには意志というものが見られないし、思考力もほとんど持ち合わせてはいないと云っ

ていいでしょう。

レースがあった翌日の夜のことです。アプとズコはパーリオに呼ばれて、昨日と同じ食料倉庫に連れて行かれました。また今夜もご馳走にありつける、と思うとアプとズコは思わず顔がほころびます。しかし、パーリオの表情は硬くて、アプとズコが食料倉庫に入ると、中からカギをしっかり締めました。どうやら妻のペクールのように「存分に食べなさい」とは言ってくれそうもありません。

パーリオは食料倉庫の奥の床にアプとズコを座らせ、その前に洋ダルごと移動してきます。そして、声をひそめて話し始めました。

「これから、秘密の話をするから心して聞くこと、いいな」

「はい、パーリオ様」

アプとズコは、飼い主のただならぬ様子に、身を固くして聞いています。

「実はな、お前たちは普通のホサピとは違うのだ。これからワシが話すことをよく聞いて、絶対に他言はしないこと。イカタック星人にはもちろんのこと、仲間のホサピにも絶対に言ってはいけない」

「はい、絶対に言いません」

正座したアプとズコは、膝の上に置いた手に力を込めて答えます。

「約束できるな。もし、お前たちが秘密を誰かに話したり、秘密がばれてしまったりしたときにはどうなるか、分かるかな？」

「いいえ、そのようなことは牧場で習っていません」

アプとズコは、口を揃えて答えました。

「そうだろう、習ってはいない筈だ。お前たちが普通のホサピではないことがばれたときには、すぐに有害獣として、殺されてしまう」

「エエッ！」

アプとズコは、顔を青くして震え上がりました。

「だからワシがこれから言うことをよく聞くこと。そして、うまく普通のホサピになりきることが大切なのだ」

恐ろしさのあまり、アプとズコは返事をすることもできずに身を縮めています。

「ワシはなあ、ホサピレースが大好きで、若いときからレース場によく通った。そのうちに自分のホサピが欲しくなって、何頭かのオーナーにもなってみた。しかし、どのホサピも足が遅くて話にならなかった」

そこでパーリオはくるりと後ろを向いて、コップにコーラをいっぱい注いで戻ってきました。彼は、アプとズコにも飲み物を勧めましたが、アプとズコはとても飲む気はしません。

「そこでワシはな、牧場の技師だったから、ちょっと細工をしたのだよ。お前たちを足の速いホサピに仕上げるためにな。まあ、簡単に言えば、ホサピは地球の原住民ホモサピエンスに遺伝子操作を施して、意志や闘争心を取り除いた家畜なのじゃ。しかし、安全ではあっても動作が鈍くて、レースに出しても遅くていかん。そこでワシはな、イカタックの掟を破ってお前たちを作り出した。つまり、お前たちには家畜化の遺伝子操作を一切施してはいないというわけだ」

そこでパーリオは、尖った口をコップの中に伸ばしてコーラを一口吸いこみました。

「そういうわけで、お前たちは普通のホサピよりも速く走ることができるし、頭もいい。いろいろなことを考える能力も備わっている。お前たちは地球の原住民であるホモサピエンスの子孫だからな」

パーリオの話にアプとズコは驚いて、思わず互いの顔を見ました。

「そういうことで、ワシは十歳になったお前たちをレースホサピとして、ここに引き取った。普通のホサピには、労務、ハウスキーパー、ナース用などと、用途別に訓練や躾(しつけ)が必要だから、まだ数年は牧場で飼育されるがな」

「あの…、私たちは特別扱い、というわけですか？」

アプが恐る恐る口を開きました。

「そうだ、エンターテイメント用のホサピ、お前たちのようなレーサーや格闘技、曲芸などに使われるホサピは十歳から個別飼育がオーケーになる。成長する前に特別な訓練を施す必要があるからな」

アプとズコは、初めて聞いた己の出生の秘密にショックを受けて、頭の中が真っ白になってしまいました。

「おいおい、普通のホサピのような顔をしていてはいかんぞ。しっかり口を閉じて、話を聞きなさい」

「はい、パーリオ様」

「まず、昨日のレースだ。初めてのことだから仕方がないが、あのように早く走ってはいけない」

「えッ、駆けっことは違うの？」

「駆けっこには違いはないが、速すぎるとまずい。お前たちの正体がばれてしまうではないか」

「分かったわ、他のホサピに合わせればいいのね」

「さすがにアプは察しがいい。それにフォームだ、走るフォームを直しなさい」

「パーリオ様、僕のフォームは良くないですか？」

「いや、良すぎるのだ。昨日のように走ったらすぐにばれてしまうぞ」

「そうか…、ではどのようにすれば？」
「そうだな、ズコは左右に体を揺らして走れ」
「へー、左右にねえ」
そういって立ち上がったズコは、食糧庫の中を右、左と交互に体を振りながら走ってみました。
「うむ、悪くない。明日からは他のホサピをよく見てな、誰も見分けがつかないようなフォームを作り上げなさい」
「私はどうしたら良いのかな？」
ズコの走りを眺めながら、アプが呟きました。
「アプはな、首を振ってごらん」
そう言われて、アプも立ち上がりました。パーリオに言われたように、首を右前、そして左後ろと回して走ってみます。最初は少しクラクラしましたが、すぐに慣れて楽に走れそうです。
「いいぞ、その調子だ。アプはそのフォームを完成させなさい」
洋ダルに納まったパーリオの周りを、アプとズコはしばらく走り続けました。ゆっくり走ってはいたのですが、アプもズコもお腹が空いてきたのでしょう。腹の虫がゴロゴロと鳴き始めたのです。
「オー、腹が減ったか。話が長かったからなー」
そう言って、パーリオはアプとズコの走りを止めさせました。そして、おいしい料理の前に連れて行き、好きなものを選ばせます。
「さあ、思う存分に食べなさい。アプもズコも」
昨夜と同じように、アプとズコはそれぞれ気に入った料理を選びます。それを電子レンジで温めましたが、パーリオが見ている手前、少しだけ上品に食べています。
「これからはホサピと同じ格好でゆっくり走って、最後に優勝すればいいのですね」
ハンバーグを平らげたズコが、パーリオに訊きました。
「ダメダメ、いつも勝ったら秘密がばれる。ワシがな、〈今日は勝て〉と言ったレースだけだよ。ほかのレースでは真ん中あたりをのんびり走ること。そうすれば、優勝したときの当たり券も高くなるからな」
「そうか、パーリオ様の指示通りに走ればいいのね」
「そうそう、そうすれば家内のペクールもますます機嫌がよくなって、お前たちは家族のように大切にされること間違いなしだよ」
パーリオは、ワイングラスに筒状の口を伸ばしながら、アプとズコの食事を笑顔で見守っていました。

3

普通のホサピと見分けがつかないように振る舞うこと、そしてホサピレースのときにはパーリオの指示に従って、勝ったり負けたりすること、その二つを条件に、アプとズコに自由が与えられました。

（これまでのお話で、アプとズコは私たちと同じ人間であることが分かりました。そこで、著者はアプとズコのことをイカタック星人の家畜ではない同胞、人間として、ここから先は尊厳をもった表現に改めます）

二人は毎日、紫色のシャツとパンツを身につけてトレーニングに出かけました。何故二人のコスチュームが紫色かと申しますと、ホサピはその役割によって身につける衣服の色が決められていたのです。たとえば労務ホサピは青、ハウスキーパーホサピは黄色、ナースホサピは赤と決まっていて、スポーツや芸能関係のエンタテイメントホサピは紫色だったのです。そのようなわけで、アプとズコが、紫のシャツとパンツ姿で走っていれば、「ああ、レースホサピがトレーニングをしている」と、ホサピはもちろん、イカタック星人たちも怪しむ者はいなかったのです。ましてズコは、走るたびに体を左右に揺らし、アプは首をぐらぐらと回しながら走ったので、二人が普通のホサピではないことを疑う者は誰ひとりいませんでした。

初秋のよく晴れた日のことです。山野をトレーニングで駆け巡った二人は、切り立った山を割くように流れる谷川で休憩することにしました。清流の冷たい水を手のひらで掬って飲み、渇いた喉を潤します。そして、女主人のペクールが作ってくれた弁当を開きました。アプが十歳レースで優勝してからというもの、弁当のおかずが増えて、味もとても良くなりました。そのお弁当を「美味しいね」と言いながら食べ終えた二人は、清流に足を入れてみました。

冷たい水が走り疲れた足に心地よいので、二人はそのまま流れに踏み込みます。水嵩はくるぶしと膝との中間くらいしかありません。二人は黙って上流に進みます。両岸にうっそうと茂る楓（かえで）や樫（かし）が緑色のトンネルを作り出しています。途中で小さな滝に突きあたりましたが、二人は飛沫（しぶき）が落ちてくる岩を這い上り、さらに上流を目指しました。

「あれ、こんなところに洞窟が！」

アプが大声をあげました。右手から細い流れが谷川に合流していて、二、三メートル先にある崖には洞窟が黒い口を開けています。澄んだ水はその洞窟の中から流れ出していたのです。

「お、面白そう！」

好奇心旺盛なズコが、細い流れに大股で入り込み、洞窟の前まで進

みました。洞窟の入り口の高さは一メートルと少しくらいで、二人が入れそうな大きさです。
「アプ、この洞窟、面白そう。中に入ってみよう！」
「大丈夫？　出られなくなったら怖いな」
「無理をしなければいいのさ、さあ、入るよ」
そう言うが早いか、ズコはもう頭を洞窟に突っ込んでいます。そして腰を低くかがめて暗い穴に潜り込みました。アプも怖い気はしましたが、洞窟の外で一人待つのは心細いので、恐る恐る入って行きます。
入り口を潜り抜けると洞窟の中は意外に広くて、二人は立って歩くことができました。左右の壁は白みを帯びた鍾乳石で、入口から差し込むわずかな光を奥まで送り込んでいました。天井から垂れたツララ石から、水滴がぽたりと落ちて、ズコの襟足に入りました。
「ひゃっ、冷たいー」
その声に驚いて、後ろにいたアプがズコの背中に抱きつきました。
「どうしたの、ズコ。大丈夫？」
「平気、平気。ツララ石の下はしずくにご注意！」
そう言いながらさらに進むと、二人の目の前に地底湖が広がりました。入口から差し込むわずかな光で、澄んだ水が青く染まって見えます。その湖面の先は真っ暗闇で、何も見えません。
「凄いところだわね」
湖の淵に立って、アプがそう呟きました。
「うん、地底湖を見ているといまにも吸い込まれそう」
「怖いから引き返そう」
アプは怖気づいて、早く入口に戻ろうと言います。そのアプを制して、ズコは暗闇のあちらこちらに目を凝らします。そして、地底湖から水が流れ出ている窪みの左に移動して、平たい岩場に立ちました。
「これはなんだろう？」
ズコが手探りで水辺を探ると、そこには小さな杭が打たれ、黒いロープが一本結び付けられていました。ロープの先は地底湖の中に沈んでいましたが、そこは船着き場のような感じがします。
「ここに、誰かいるのかなあ？」
ズコが暗闇の中で首を傾げました。
「そんなことあり得ない。こんな山奥の洞窟だもの」
アプはズコの言葉を強く否定して、早く戻ろうと催促します。そのとき、地底湖のはるか先にかすかな明かりが見えました。
「あれ、何か光った！」
「ズコ、あなたは空想家だから幻を見たのよ」
そう言って、アプはズコの手を入口の方に引っ張ります。

「あっ、また光った！」
地底湖の奥に小さな明かりが現れ、それは次第に大きくなってきました。アプとズコがあっけにとられているうちに、明かりはこちらに近づいてきます。その明かりが数メートル先まで来たとき、ズコが叫びました。
「ボートだ、ボートがこっちに」
舳先に付けた橙色の明かりに照らされて、小型のモーターボートがアプとズコの前に現れました。しかし、そのボートには誰も乗ってはいません。多分、遠隔操作で動いているに違いありません。その無人ボートは、二人が立っている岩場にぴたりと止まりました。
「ようこそ、小さなお客さん。あなたたちをお迎えに来ましたよ。何も怖いことはありませんから、安心してこのボートにお乗りなさい」
ボートに設置された音響装置から、二人を歓迎する女の人の声が流れてきます。その声はとても優しそうで、アプやズコはまだ会ったことのない母の声のように感じました。
「ボートに乗る前に注意します。杭に付いているロープでボートの舳先と後部の二カ所をしっかり結びなさい。湖に落ちるととても危険だから、乗り降りするときには必ずボートを岩に結びつけるのですよ」
「はい」
ボートからの声があまりにも優しく聞こえたので、アプとズコは思わず返事をしてしまいました。返事をした手前、ロープを結ばないわけにはゆきません。ズコが水に沈んだ黒いロープを引き上げると先が輪になっていました。その輪をボートの舳先にかけて引き寄せます。ボートの後ろあたりの暗がりを探してみると、そこにも杭に結わえたロープがありました。やはり先に輪がついていたので、ズコがボートの後部に付き出た棒にひっかけます。ボートがしっかり岩場に固定されると、もう二人は乗らないわけにはゆきません。ズコが先に乗り、その隣にアプが座りました。
「それではロープを外してください。湖に落ちないように注意して」
音響装置から流れる声に導かれて、ズコが二本のロープを外しました。するとモーターがゆっくり回り出して、ボートは岩場から離れて行きます。地底湖の真ん中を真っ直ぐに進んだボートは、五分ほどで対岸に着きました。
そこは天井がとても高くて、広いホールのようになっていました。何故それが分かるかといえば、天井や左右の壁から淡い光が差し込んでいて、洞窟の中が見渡せたからです。それに洞窟に入ったときのように、地面に水は流れていないので、安心して歩くこともできそうで

す。
アプとズコは薄暗い広場に降り立って、しばらくあたりを見回していました。ホールのような広がりのあちらこちらにトンネルのような穴が開いています。それらの一つから、淡い光が漏れ出していました。その橙色の光は、明るくなったり、暗くなったりするのです。
「アプ、あの光は僕らを呼んでいるように思わない？」
ズコが、点滅する明りの方を指さして言いました。
「そうね、誰かが合図を送っているのかもね」
とても怖かったので、二人はしっかり手をつないで狭い洞窟に入っていきます。そこは、二人が楽に歩ける高さでしたが、左右に曲がりくねって先はまったく見えません。二人が、四つ目の角を曲がると、天井が高くて明るい小部屋が見えてきました。その小部屋に怖々入ると、真ん中に白髪の老人が座っていました。
「よく来たな、お子たち。この日を、長いあいだ待っていたのだよ」
老人の脇には、やはり白髪の老婆が横たわっていましたが、身動き一つしません。生きているのか死んでいるのか、それさえも定かではありません。アプとズコは互いにつないだ手にギュッと力を込めて、驚嘆の声を出さないように努力しました。その二人を見て、老人が穏やかに言いました。
「びっくりさせてごめんよ。ワシは君たちと同じ人間だよ。歳をとって姿かたちは変わってしまったが、この地球に長く生きてきた人間の年寄りだよ。だから、何も恐れることはないし、心配もいらないよ」
「本当に？　家畜のホサピではないの？」
アプが確かめるように訊きました。
「そう、ワシらは生粋（きっすい）の人間だよ。ここで暮らすようになって、かれこれ三〇〇年以上も過ぎてしまったがな」
「へえー、三〇〇年以上ですか。でも、どうして？」
「それはな、世界を巻き込む核戦争で、人間は地上で暮らせなくなったのじゃ。それで生き残った人類は、核シェルターやこのような洞窟に籠ってな、そこで暮らすようになったというわけさ」
「あのー、核戦争って何ですか？」
ズコが初めて聞く言葉に疑問を抱いて、老人に訊きました。
「そうか、ホサピ牧場で育った君たちには分からない。当たり前だな」
「そんなー、もったいぶらないで教えてよ」
好奇心の強いズコは少しすねて言いました。
「核戦争を正しく理解するためには、まず人類の歴史から勉強しなければな。それを今すぐに、というわけにはいかないから、次の機会

にしよう」
老人からそう言われて、ズコもアプも不満顔です。
「それより君たちは喉が渇いただろう、何か飲み物を差し上げよう」
そう言って老人は脇に置いたリモートコントローラーの一つを取り上げ、指先で操作します。すぐに部屋の奥からロボット、背丈はアプやズコと同じくらいで、よちよちと歩く二足歩行のロボットが現れました。
「何のご用ですか、ジースリーエイト（Ｇ８８８）」
「あー、お客様にな、好きな飲み物を差し上げなさい」
「はい、かしこまりました」
ロボットは体の向きをかえて、アプとズコの方に寄ってきました。
「いらっしゃいませ、お客様。好きなお飲物を選んでください」と、二足ロボットは胸のあたりからメニューを取り出しました。アプがオレンジジュース、ズコがコーラを指さすと、「オレンジジュースとコーラですね。それでよろしいですか」とロボット。二人が頷くと「すぐにお持ちしますから、しばらくここでお待ちください」と言って部屋の奥に入って行きました。
「すごいロボット、何でもできそう！」
ズコがそう叫ぶと、老人は笑顔で答えました。
「とても優秀なロボットで、ワシたちの食事や身の回りのことは全部やってくれるよ」
「へー、イカタック星人より進んでいるかも」
「あー、部分的には人類のほうが勝っていることもあるよ」
二足ロボットが盆に飲み物を載せて現れました。
「ジースリーエイト、お客様に飲み物を差し上げます」
そう言って、ロボットはオレンジジュースをアプに、コーラをズコに手渡して奥に引きさがりました。
「あなたの名前はジースリーエイトと云うのですか？」
ジュースを一口飲んで、アプが訊きました。
「あー、かつてはここに百人以上の人間がいたからね、識別のためには名前や記号が必要だった。しかし、今ではワシと妻の二人だけになってしまったから、もう名前もいらないさ。しかし、そうだな…。ワシのことはヒゲ爺とでも呼んでおくれ」
「ヒゲ爺ですね、分かりました。僕はズコと言います」
「ほう、変わった名前だが、誰につけてもらったの？」
「主人のパーリオ様です。半年前に牧場からお屋敷に移されたときからです。パーリオ様から聞いたのですが、このあたりに住んでいたホサピの先祖に〈ムナカタズコー〉という絵かきがいて、とてもふ

くよかな絵を描いたとか。その画家の絵が好きだったパーリオ様が付けたと」
「そうか、それは棟方志功（むなかたしこう）という有名な画家の名前だよ。地元の人は訛（なま）ってズコーと発音するからな」
ズコは、自分の名の由来を、目を輝かせて聞いていました。
「私はアプ、女主人のペクールがこの辺でよく採れる果物のことを原住民がアプと呼んでいたからって」
「そうか、アプか。人間はアップルと呼んでいるが、短くて良い名前だ」
ヒゲ爺はそう言って細い目をさらに細めました。
「もう帰らないとパーリオ様に叱られてしまう。ヒゲ爺、また来てもいい？」
「オー、大歓迎だよ。ワシとこの婆さんが最後の人類になってしまうと諦めていたがな、君たちがいればそうはならない」
「だって、ヒゲ爺、僕らはホサピの真似をして、家畜のようにしか生きられないんだよ」
アプとズコは急に顔を曇らせ、泣き出しそうな声で言いました。
「いや、チャンスはあるさ。人類がこの地球の主役の座を取り戻すチャンスが」
「そんなこと、できる？」
「うん、きっと、きっとな。そのためにはアプとズコ、これから沢山のことを勉強しなければならないよ」
「ふーん、勉強かー」
「だからね、これからは主人のパーリオたちに見つからないように注意してここに何度も来ること。このヒゲ爺が、人類の歴史やいろいろなことを教えるから」
「本当に。いろいろなことを教えてくれるのね」
アプとズコは顔を輝かせて、ヒゲ爺の住む洞窟を後にしました。

〈以下、次号〉

私が生きた街

唐瀬　光

1

地下鉄の階段を登ると急に肌寒い風が通り抜けた。季節は十一月。もうすぐ秋が終わる。私はくたびれかけたスーツの襟を立て、寒風と言うにはまだ早いが、かなり冷たい乾いた空気の吹き抜ける東銀座の街に出て行った。

ここから橋を渡って真っ直ぐ築地の方に歩けば、これから勤める会社のビルに着く。だが時刻はまだ朝の七時。会社が始まるまで一時間半もある。私はその辺りをぶらぶら散歩しながら時間をつぶすことにした。

歩道をちょっと行くと高速道路をまたいでコンクリートの橋が架かっていた。私は橋の手前で右に折れ、轟音をたてて流れる自動車の群を見下ろしながら、新橋演舞場の方へと向かった。

左手に薄茶色のひと際高いがんセンターが見える。私が二十年前にお世話になった病院だ。三十五歳の頃皮膚ガンを患って、恐怖の思いをたっぷり味わった所だ。当時はあんなに明るい高層のビルではなく、薄暗い感じの所だった。病巣はたいしたことはなく、切り取ってお終いだった。再発もなかった。最初の十年間は毎年検査に通ったが、その後足が遠のき、今ではすっかりご無沙汰にしている。

「ＢＣＣだ！」
丸い顔をした初老の医師は私の鼻にできた青黒いシミを見るなり、うれしそうな声をあげた。
「ほお〜っ、これはみごとな円形だ。おい、これを撮っておけ。いい見本になるぞ」
周りの助手らしき者や看護婦たちも、私の鼻を見つめて感心したようにうなずいている。
「ビーシーシーってなんですか？　やっぱりガンなんですか？」
不安な思いでいっぱいの私は、身を乗り出すようにして尋ねた。
「えっ？」
その時先生は初めて私の顔をまともに見た。まるで『標本がしゃべった』というような不思議な顔をして。
「ああっ、ＢＣＣというのは基底細胞癌（きていさいぼうがん）のことだよ。これはかなり進んでいるが、切るだけでよさそうだね」
そう告げられた時、私は頭がクラッとして地獄の大きな淵を見たような気がした。当時はガンに罹ったら、まず死ぬものだと思っていたのだ。
「転移、してますか！」
勢い込んで尋ねた私の顔は、きっと蒼白だったに違いない。
「あ、いや、この種のガンはめったに転移しないから大丈夫。学者によっては、これを良性腫瘍と言っている人もいるぐらいだからね」
先生は「大丈夫」と胸をたたいて、「検査しなくても、私ぐらいになると、一目見ただけで、なんの種類か分かるのだよ」と自信たっぷりに言い切った。
「でも、ほっとくと転移するんでしょう」
しつこく食い下がると、先生は（やれやれ）といった感じで立ち上がり、傍の本棚から分厚い医学書を取り出した。そしてその付箋の付いたページを開いて、指でその一行を示した。そこには『基底細胞癌：転移の最も薄いガンで死亡率ゼロ』と書いてあった。その時、白髪混じりの頭をした先生の顔が仏様のように輝いて見えたのは単に錯覚だったのだろうか。
（あれから、二十年たった……）
感慨にふけりながら歩いていると、道路わきの白いビルに喫茶店があった。まだ早いのか店内に客はまばら。若い女の店員が数人カウンターの中で立ち働いている。
（コーヒーでも飲んで時間をつぶすか）
私は扉を押して中にはいった。

「いらっしゃいませ」

若い女の店員が、にこやかに営業スマイルを見せる。私は彼女にアメリカンコーヒーを注文して百円硬貨を三枚渡した。代わりにコーヒーのはいったカップをもらって窓際の席に着く。それをちびちび舐めながら、ハローワークに通ったここ半年の出来事を思い出した。

『早期退職』……聞こえはいいが事実上のリストラだ。五十五歳になると、役員以外は皆肩書きを外される。つまり平社員に格下げになるのだ。これまで部下だった者が上司になる。男にとってこれほどの屈辱があるだろうか。それが嫌なら会社を辞めるしかない。

私が五十五歳にあと一年という時になって、社長は私がいる席で「ロートルはいらん。ロートルは使えん」と繰り返すようになった。「役員にはしてやれん。辞めてくれ」と言っているのだ。

美味しそうな飴も用意してあった。早期退職優遇制度というやつだ。五十五歳で辞めると、要支給額の五割増しの退職金がもらえる。その割増し分だけで一年間なにもせずに食べていける。

有能でほかでも十分通用しそうな人にはチャンス到来だろうが、そういう人は会社が手放さない。取締役とか監査役とかにするし、そこまでなれなくても顧問とかの肩書をつけて残そうとする。

女には理解できないだろうが、男にとって『肩書』は人生を左右する重要な資格なのだ。会社を定年で辞めた後、自分の名刺に『元…部長』と入れる人もいると聞く。笑い話に聞こえるが、本人にとっては大まじめ。組織に属していないという状態にいたたまれないのだろう。

また、ある本で読んだのだが、これまで会社人間だった者が定年になり急に暇になると、その後の生存率はたった五年だそうだ。極端な話だとは思うが、老化が加速している高齢者になると、生き甲斐の喪失が身体を急速に衰えさせるのだろう。

いや他人事ではない。かく言う私もまた、この半年間たっぷりとそういう気持ちを味わった。退職したばかりの頃は、頭上の暗雲が取り払われたようにさわやかで、まるで学生時代に戻ったようにウキウキした気分だった。だが、それもわずかひと月。次第に周囲の目が気になるようになった。

まず近所のオバサン連中。私は家の中にいるのが退屈で、よく団地の周りを散歩した。ある日、オバサン（中には若い主婦らしいのもいた）たちの井戸端会議に出会った。側を通りかかると、それまで、かしましくおしゃべりに熱中していたオバサンたちが、ピタッと話をやめ一斉に私の方を振り向いた。それからあわてたように目をそらすと、口に手を当ててヒソヒソ話に切りかえた。私が通り過ぎてもヒソヒソ……。チラッと後ろに目をやると、皆こちらを注視しているように見

えた。なんだか平日の昼間に団地を徘徊している怪しいオジサンに見られているようで、はなはだ居心地が悪かった。

そのことがあってから、出かけるのは彼女たちがお昼を食べているだろう十二時半と決めた。自宅を出てそのまま三十分ほど歩くと比較的大きな図書館がある。私は閉館になる夕方まで、そこで読書や昼寝をして過ごした。そこには私と同じような年齢の人がいつも十数人、私と同じように過ごしていた。今思えば、肩身は狭いが気楽な生活だった。

思い出にふけっていると、たちまち一時間が過ぎた。

（もう行かなくては……）

初日から遅刻ではサマにならない。私は重い腰を上げ重い足を動かしながら築地の方に向かった。

ふと気がついてみると、いつの間にか女生徒たちの集団に囲まれていた。いや、『囲まれていた』という表現は正しくない。もともと登校中の彼女たちの群れに、私が『まぎれ込んだ』ということらしい。黒いセーラー服に身を包んだ女生徒たちが笑いさざめきながら、次々と追い越して行く。中には私の背中にぶつかりそうになって、あわててよける子もいる。彼女たちの幾人かにギロッとにらまれた。「なに、このオッサン。邪魔だよ」と言いたいような目つきだ。これから人生の始まる彼女たちの目には、初老のしょぼくれたオジサンの姿など映っていないに違いない。

彼女たちの動きは早い。身軽にぴょんぴょんスキップしながら駆けて行く子もいる。よく見ると男子生徒の姿が全く見当たらない。セーラーカラーに二本の白線を入れた中学生風の女生徒。小学生だろうか、白線三本の幼い顔をした女の子。どこかこの近くに女子校でもあるのだろう。私は彼女たちの邪魔にならないように端の方に寄って歩いた。

ふと隣を見ると、一人の背の高い女生徒が追い越して行くところだった。ショートカットの髪がおもながの顔に貼りついている。襟元から覗く白いうなじに思わずハッとさせられた。その落ち着いた態度から三年生だろうか。彼女は連れもなく、紺色のバッグを肩に、伏し目がちに歩いて行く。そのほっそりとした姿は、やがてほかの女生徒たちとともに街角に姿を消した。

2

私が再就職した会社は、社長を入れて十四、五人の小さな商社だった。商品は海産物。主に仕入れを海外に頼り、タイ、中国などの工場と提携している。主体は営業部。川村という専務を筆頭に男女十人の

メンバーだ。私が配属された管理部は、総務と経理を兼ねているというのにたった三人。

私がこの会社に就職できたのは、ここの管理部長だった人が親会社から派遣されて来た新社長とそりが合わず、喧嘩して辞めたからだという。細かい業務ができない社長は、困ったあげく、前の会社で同じ管理の仕事をしていた私に目をつけたという訳だ。私にとっては渡りに船。半年間就職活動をしても目星が立たず、『もう事務職は無理』と、あきらめかけていた矢先のことだった。

だが、それもどうやら短期間。せいぜい一年か二年。先週、入社打ち合わせの時に、社長の増田氏にはっきり言われた。「ここは新たなスポンサーが現れない限り清算することになる。これは親会社の意向で、その期限は一年」だとか。

それを聞いてハハンと思った。私が勤めていた前の会社ユウヒ・ボイルも、親会社は同じ大正食品だった。上場企業はどこでもそうだろうが、コンプライアンスとか内部統制とかにやたらうるさい。異常に潔癖な消費者のおかげで、生産や販売の過程にほんのちょっとミスがあっただけで、マスコミのバッシングを受ける。中には倒産に追い込まれた会社も多い。それに近年は米国流の連結決算とやらで、親会社と子会社は一体だと見なされている。子会社の不祥事が、直ちに親会社の責任問題となる。親会社としては、目の行き届かない子会社をできるだけ早く切り離したいのだ。増田社長はこの会社を整理するためだけに送り込まれて来たのだ。だが、これは、即従業員の職を奪う行為ともなる。社員数が少ないとはいえ、これは労働争議に発展するかも知れない。

つまり彼は私に会社の清算を手伝ってくれと言っているのだ。自分一人では心もとないのだろう。

（まあ、一年でもいいか……）

その間に資格を取って別の仕事を見つけるのだ。うかつなことだが、私はこれまで経理一筋でやって来たのに、資格はなにも取っていなかった。これまで『資格なんか持っていても仕事ができるワケでなし』と、バカにしていたのだ。そのつけが今になって回って来た。

「あなたが、いくら仕事ができると言っても、雇う側は分からないでしょう。せめて資格の一つでもあればねえ……」

先日、ハローワークの職員に言われた言葉を改めて思い出した。

再び私のサラリーマン生活が始まった。仕事そのものは今までやって来たことの繰り返しだった。親会社が同じなので会計のやり方も似ていて、仕事に不安はなかった。

ただ従業員の構成は前の会社とかなり違っていたので、最初はとまどった。ここでも課長、係長と、それぞれ役職はついていたが、みんな互いに「さん」付けで呼び合っていた。雰囲気も家族的で心地好かった。それに、ここの女性社員は皆自発的に行動し、自分で考えて仕事をこなしていた。それに比べて前の会社では男性の上司から言われた事しかやらず、手が空くとぺチャクチャおしゃべりに熱中したり、インターネットなどを覗いたりしていた。「結局、女は補助員にしか使えない」と、私の友人だった営業課長はこぼしていたものだが……。

私はここのＯＬたちに、仕事の上でも、精神的にも、ずいぶん助けられた。特に管理部の渡辺さんは一番若いＯＬだが、新しく来た私のために、きちんと仕事の段取りを整えてくれた。もう一人の本間さんは四十路のパートだったが、勝手のわからない私のために、よく気を使ってくれた。営業部には若い派遣社員の他に、いずれも三十代と思える二人のベテランがいて、仕事のことは丁寧に教えてくれた。

男性社員は営業部に五人いたが、若い一人を除けば、いずれも三十代で課長や係長の肩書を持っていた。営業ではこの五人が中核らしい。息子のような年代だが、みんなここのヌシだ。私が挨拶すれば挨拶を返すが、それ以上のことはない。時々チラッとこちらを見てあわてて目をそらす。私がどんな人間か、敵か味方か、識別しているのだろう。私はここの男たちにはかなり気を使った。

前の会社に勤務していた時と同じように、毎日が回転していった。いざ中にはいってみると、こぢんまりとした良い会社だった。利益も、そこそこ上がっている。親会社がここを清算する理由がないように思えた。やはりコンプライアンスの問題なのだろうか……。

増田社長は業務に忠実な人だ。親会社に言われたことを一秒でも早く実行せねばならぬと思い込んでいるのか、会社をいかにして整理するか「ああでもない。こうでもない」と毎日こねくり回して悩んでいるようだ。もし私が社長なら、のらりくらりとやって一日でも長くこの会社を存続させようと努めるだろうに……。

私は会社の清算という暗い話にはあまり関わりたくなかった。そういう訳で、ひたすら目前の業務にだけ専念することにした。清算によって、ここの従業員がどうなるのか、なんて私の考えることではない。もっとも、そういう状況はみんなうすうす気がついていて、自分の行き先を探している様子だった。

（まあ子供じゃあるまいし、自分のことは自分で解決するだろう）

そう割り切ると会社生活もまた楽しかった。私は毎朝七時半に東銀座の駅に着き、いつもの喫茶店でアメリカンを注文し、登校する女の子たちを眺めながら時間をつぶした。そうやって例の女生徒が通りか

かるまで、ちびりちびりコーヒーを舐めていた。その子の姿を見るのが一種の癒しになった。

（ロリコンか、おれは……）

多少後ろめたい気がしたが（話しかけるワケでなし、目に見えるのだから、しょうがないわな。いくら中学生だからって、美人なら誰でも気になるだろう）と、いくぶん開き直った。彼女が通り過ぎてから、おもむろに腰を上げ、会社の方に向かった。

たまに、その子が、遅れているのか姿を見せないことがあった。私は会社の始業時間があるので、いつまでも待つわけにはいかない。そういう時には、ちょっと損した気分になって店を出ることになる。

「その子」と言っても、背丈は私と同じくらいだから、たぶん学年でも一番か二番目に高いだろう。おもながの顔にショートカットの短い髪。スラッと立った背筋。ちょっとうつむき加減に、ほかの子たちの流れに乗って足早に歩いて行く。その透き通るような白い肌は、漆黒のセーラー服によく映えていた。ただ、そのボーイッシュな姿からは女の色気が全くと言っていいほど感じられない。十四、五歳というのは、昔ならもう嫁に行ってもよい年頃だ。当然乙女の色香が漂っていてもおかしくない。現に周りの女生徒たちは、私服にでも着替えたなら若い女の華やかな姿に一変すること請け合いだ。

だが、その子はいつも一人というわけではない。週一、二回ほどは、ツインテールの小柄な子と一緒に登校して来る。そばかすを散りばめたその子とはよほど気が合うのか、いつも楽しそうに笑い合っていた。

（友達がいるんだ……）

私はその微笑ましい光景に、なんとなくホッとした気持ちになった。

ただ、毎朝眺めているうちに私はあることに気づいた。その子は集団で登校して来る女生徒たちのほぼ中央に位置しているのだが、その周りの女子たちの顔ぶれがいつも同じなのだ。その中には、竹刀袋を肩に担いだ剣道部とおぼしき強そうな感じの子も交じっていた。登校時間が皆同じなのだと言ってしまえば、それまでなのだが……。

正月を過ぎてから、ようやく職場に溶け込むことができた。近寄りがたかった男性社員の幾人かとは、冗談を言い合うまでになった。社長は親会社からせき立てられるのだろう、「なんとか早く清算を」と焦っている様子だったが、私はずっとこのまま続いてほしかった。

そんなある日のこと、いつもの時間に出社すると、社長が私の顔を見るなり「ちょっと来てくれ」と言った。何事かと社長室に行くと、「ドアを閉めて」と言う。どうやら内緒の話らしい。

入口のドアを閉め、いくぶん緊張してソファーに座ると、彼も私の

前に座り「やっと決まった」と硬い表情で言った。
（はあ、決まったってなにが？）
首を捻っていると、社長は噛んで含めるように説明を始めた。
「前にも話したと思うが、親会社はこの『築地フーズ』を切り離そうとしている。問題はどうやって手を引くかだが……。実はこの会社は専務の川村さんが立ちあげたようなものなんだ。以前から川村さんは自分にゆずってくれと言っていたのだが、昨日ようやくそれが認められた。この会社は川村さんのものになるだろう」
そこまで言って、彼はなんだか悔しそうな顔をした。川村さんに恨みでもあるのだろうか。
「川村さんは、別に小さな会社を持っているから、そこでこの事業を引き継ぐと言っている。資金を出してくれるスポンサーも見つけたようだ。そういう訳で、この事務所は五月で閉めることにした。来たばかりのあなたには申し訳ないが、ここの整理を手伝ってくれないか。あなたの将来のことは考えて置くから」
彼はそう言って、なにかふっ切れたような顔を見せた。
川村専務もようやく自分の会社が持てるようになったからか、見違えるように張り切っていた。だが、事はそうすんなりとはいかなかった。まず、専務と一緒に新会社に移ると見られていた、ここの若い衆（男性社員）が皆、申し合わせたように拒絶した。「あの専務と一緒にはやれない」と言うのだ。私はそれを聞いて耳を疑った。営業部は川村専務を中心に一種の軍団を組んでいるような印象を受けていたのだが……。
専務自身も、これには意外だったようで「なぜだ！」を連発していた。これまで自分の手足となって働いてくれた中堅社員が一人もついて来ないのでは、あの複雑な海外仕入れや、営業マンの顔で売る国内販売がうまくいくはずがない。
「どうして行かないの？」と問う私に、彼らの一人は「川村さんの独りよがりにはもうついて行けないよ」と答えた。考えてみれば、（なるほど）と納得させられる場面もあった。確かに専務にはワンマンなところがある。
しかし、この手の人は、私が去年まで勤めていた会社にはゴロゴロいたのだ。（この不況の世に、雇ってくれるだけでも、ありがたいのでは……）と、思ったりしたが、どうやらその時には、彼らのほとんどは、『すでに、ほかの大手会社に内定していた』というのが真相らしい。
嗅覚の鋭い彼ら営業マンは、当にこの会社に見切りをつけ、転職の道を探っていたということだ。
ところが、新会社に移らないのは男性ばかりではなく、女性社員た

ちも同じように拒否するようになった。みんな申し合わせたように川村専務との面会を拒んでいる。どうしてなのかを、それとなく部下の渡辺さんに聞いてみたが、言葉を濁して詳しいことは教えてくれなかった。

会社の整理が本決まりになると、増田社長は精力的に動き始めた。彼はまず人員の整理から始めた。パートで働いていた本間さんを強制的に辞めさせたのだ。二月末が雇用契約の終了日だからと言うのだが、もう何年も使用していた人を、契約期間が切れたからという理由だけで、解雇して良いものだろうか。もうじきこの会社はなくなるのだ。せめてそれまで置いてやれなかったものだろうか……。

怒ったのは当事者の本間さんばかりでなく、ベテラン女性社員の永山さんもそうだったらしく、かなり増田社長に噛みついたということだ。そう、私も彼女にきつい言葉を投げつけられた。どうやら、社長と同類だと思われているらしい。

永山さんは背が高い。声は低くドスが効いている。丸い顔に二つの大きな瞳。睨まれるとかなり怖い。それに彼女は美人だ。美人だが怖い。まるでネコ科の猛獣と相対しているようで、私はこの人に映画で見たアマゾネスの戦士を連想した。

ふと彼女に、毎朝見かけるあの女子中学生の姿が重なった。あの子も二十年経ったら、この人みたいになるのだろうか……。

いいや、それは違うように思える。あの子からは女の雰囲気は全く感じられないが、この人は濃い化粧に短いスカートと色気ぷんぷん。とても中性的な感じではない。

（人に使われずに自分で起業したらいいのに。このパワーがあれば、成功するかも知れないのだが）

そう思って本人にも言ったが、笑ってはぐらかされた。

辞めたのは本間さんばかりでなく、二人の男性社員も相次いで辞表を出した。大手商社に就職が決まったという。社長は慰留したが、聞いてはもらえなかったようだ。

さらに派遣で来ていた女性二人もいなくなって、事務所の中は主のいない机や椅子で歯の抜けたようになった。

3

三月にはいると、清算の準備は急速に進められた。十数年続いた企業というものは、事務所内の配線もそうだが、目に見えない権利関係が網の目のように絡みついている。それを、過去の書類に当たりながら、一つ一つ整理するのだ。その作業を社長と私、三人の女性事務員

だけでやって行かなくてはならない。まだ残っている三人の男性社員は、こういう煩雑な事務作業にはほとんど役に立たないし、専務は新会社の立ち上げに忙しいのか、この会社の業務には関与しようとはしなかった。

私は、毎日朝八時半から夕方五時まで、女性社員たちと、そのような気の進まない作業に没頭した。季節もわずかに春めいて、柔らかい風がそろそろと吹き始めていた。

（三月も、もう十日が過ぎた）

ふと壁の時計を見ると、三時近くだ。

（今日も、もうじき終わる……）

ちょっと手の空いた私は、パソコンの画面をネットの政治欄に切り替えた。なにせ、クリーンを売り物にしている総理大臣が外国人から献金を受けていたという。事実なら公民権停止、首相どころではない。

二年前の総選挙では『国民のための政治』を唱える新党が政権を取った。（これで、世の中が良くなる。汚れた政治はもうお終いだ。これからは、みんな豊かになる）と国民の大多数がそう思っただろう。現に、この私もそう願って『貴重な』一票を投じた一人だった。

だが、事態はなにも変わらず、かえって悪くなったようなものだ。

（全く、今の政権にはロクなやつがいない……）

ぼやきながらパソコンを眺めていると、突然画面がぶれた。と、同時に私の身体も斜めに揺れた。

「わっ！」

悲鳴を上げて机にしがみつく。大きな音がして、書棚から本や書類がバサバサ降って来た。キャーッという女の悲鳴。事務所の中が大騒ぎになった。

「地震だ、逃げろ！」

社長室から飛び出して来た増田社長が、真っ先に出口に向かった。

「今、出ると危ない。ここの方が安全だ。しばらく様子を見よう」

私はそう呼びかけたが、みんなは自分の荷物を手に取ると、我先にと非常階段を駆け下りて行った。

揺れは何回もやって来た。揺り戻しにしてもかなり大きい。

（震度五、いや六くらいか……震源地は？）

まだ映っているパソコンの画面を見ると、『東北地方に大地震発生。震源地は三陸沖。津波に注意』と出ていた。

（海上か……たいしたことないな……揺れは大きかったが）

私は冷静にパソコンの画面を切ると、金庫に鍵をかけ、スーツの上から黒いコートを羽織って、誰もいなくなった事務所を出ようとした。

ドアの所まで来ると、横の会議室から早口でまくしたてる声が聞こ

える。どうやらテレビのアナウンサーらしい。
（テレビがついている……消し忘れか？）
会議室を覗いてみると、丸顔の中年男が一人、椅子に腰かけていた。背中を丸めて、うつむき加減にテレビに見入っている。
（専務だ。帰っていたのか）
私が中にはいると、彼は驚いたようにこちらを振り向いた。
「あなたか。ちょっとこれ見て！」
彼は私を見るなりテレビの画面を指差した。
私がテレビを覗いてみると、海岸に向かって大きなうねりのようなものが押し寄せていた。それはどす黒く濁ったような色をしている。砂浜に到達した濁流はやすやすと堤防を乗り越え、立ち並ぶ家々に覆いかぶさって来た。道路を走っていた車が、あっという間に飲み込まれる。広場が海のようになり、その上を大きな船が流されて行く。
「津波だ！」
私は呆然とその画面を眺めた。それは、これまで見たことも聞いたこともないほど大きな波だった。りっぱな家が、そのまま船のように移動している。テレビの画面からは、実況を報道するアナウンサーの悲鳴に近い声が流れていた。
「見てよ、倉庫が軒並みやられている。こりゃあ、東北の海産物は全滅だな」
仕事人間の専務は、さっそく商売のことに頭が行くらしい。
「ウチは、ほとんど海外仕入だから関係ありませんね」
私も調子を合わせる。長年の会社生活が身に染み込んでいて、こういう時にも儲けることに思考が回るようになっていた。大勢の人が死んだだろうということは、頭の隅にしかなかった。
専務と私は会議室の椅子に腰をかけて、外が薄暗くなるまでテレビを見ていた。ひっきりなしに大きな揺り戻しが来たが、もうたいしたことはあるまいと、外に逃げ出すことはしなかった。
「あなたは今夜どうします？　電車は全部止まってるようだけど」
専務は、ようやく私のことに注意を向けた。
「この事務所に泊ろうと思います。ホテルは満員でしょうから」
「この近くに避難所がありますよ。ここから見えるあのお寺です。みんな、そこに行ったのでしょう」
彼は立ち上がって窓の外を指差した。
窓から向かいの通りを見下ろすと、そこは多くの人でごった返していた。立ち並ぶビルの前を行ったり来たりして、まさに帰宅に困っている様子だった。ビルの間から寺院の屋根が見えた。私が毎日通勤途中に見かけるお寺で、一風変わった造りになっている。どこが変わっ

ているかというと、木造ではなく鉄筋コンクリート造りになっているのだ。まあ、それ自体は現在ではあまり珍しくない。お寺を改築する時、木造からコンクリートに変えた寺社もかなり見受けられる。でも、その形状は木造の時と同じように、屋根の先が反った造りにするのが普通だ。だが、このお寺は天竺様式というのか、屋根の部分が丸くなっていた。インドなどの南アジアで見かける寺院によく似ている。その建物はかなり大きく、ここなら大勢の人を収容できそうだ。なるほど避難所としてはうってつけの場所だろう。

「専務はどうされるのですか？」

私は彼がどこから通勤しているのか知らなかった。

「私は近いのです。歩いても十五分ぐらいですよ」

「えっ、そんな近くにあるのですか？」

「マンションだけどね。もう十年になるかな。ここに事務所を移してからすぐだったなあ」

彼はここに引っ越して来た時のことをひとくさり語って聞かせた。

「一緒に食事に行きませんか。もう夕方だし」

彼は机のカバンを取って立ち上がった。

私はドアに鍵をかけ、専務の後をついて非常階段を下りた。もちろん、エレベーターはすでに非常停止していた。

川村専務と二人、築地の裏町にはいって行った。こんな震災の最中にも開店している店がある。中にはいるとけっこう繁盛していた。帰りそびれたのだろうか、勤め人風の人が多い。専務が端の方に席を取ると、すぐウエートレスがやって来た。彼女は絣の着物に紅い帯を締めている。専務を見ると「あら！」とうれしそうに笑って「いらしゃいませ」と丁寧にお辞儀をした。専務も顔をほころばせている。どうやら旧知の仲らしい。

彼は好物の泡盛を飲みながら、この会社を設立した時の苦労を熱心に語った。十年前に三人だけで始めたこと、中国からの仕入れに奮闘したこと、会社をこれだけ大きくしたこと、それをほとんど自分一人の力で成し遂げたこと、云々……。

私は話を聞いていて、なぜ若い衆（彼の部下）がそろいもそろって、彼について行くのを拒否したのかが分かるような気がした。要するに、この人は他人の気持ちを察することができないのだ。『自分さえ一生懸命やっておれば、みんな必ずついて来る』ものだと思い込んでいるらしい。人には千差万別の思惑があるだろうに。

だが、経営者（特に創業者）というものは、そのように自分本位な考え方をする人が多いのも事実だ。生き馬の目を抜くような業界にあっては、いちいち他人の心配をしていられないのだろう。従業員は職

を失うだけだが、本人は全財産を失うのだ。中には自殺する者も多い。まあ、お互いにもう少し相手を思いやる心さえあれば、こういう事態にはならなかったと思うが……。

話しているうちに、いつの間にか八時が過ぎた。専務は「もう帰らなくては」と言って立ち上がった。レジで私の分も払ってくれたが、きちんと領収書は受け取っていた。それから彼は近くのコンビニにはいり、パンやウローン茶をレジ袋いっぱい買い込んで私に渡した。

「みんなで食べてください。避難所のお寺にいると思うから」

そう言って、彼は通りを渡って街角に姿を消した。

4

コンビニ袋をぶら下げて、お寺の境内に来てみると、そこには、老いの若いの、さまざまの人が行き交っていた。人々の集まる方に向かって行くと、本堂脇の建物が避難所になっていた。これもコンクリートの頑丈そうな二階建てで、公会堂のように四角形をしている。

正面のドアを開けて中にはいると、「うああ！」と思わず驚きの声を上げた。中は人、人、人。広間いっぱいにパイプ椅子が並べられ、大勢の人が窮屈そうに腰掛けていた。

呆然としてその様子を眺めていると、「芝さん」と呼ぶ声が聞こえた。声のする方に目をやると、会社の一番若手である橋本君が、私に向かって手招きしている。彼の周りには一緒に来たのだろう増田社長を始め、築地フーズの社員たちが数人固まっていた。渡辺さんたち女性社員の姿も見える。側に行くと、中堅ＯＬの水村秋子さんが、隣のパイプ椅子から荷物を下ろして、私のために席を作ってくれた。

「芝さん遅かったですね。どこ行ってたの？　橋本君が会社まで行ったけど明かりが消えていて、ビルにもはいれなかったって」

彼女も、その隣の渡辺さんも心配そうな顔をしていた。永山さんなんかは、非難するような視線を私に向けていた。

「ああ、お腹が空いたから、近くの店で食べていた」

私はごまかして「はい、夜食」と、専務のくれたコンビニ袋を差し出した。彼と一諸だったことは、この際伏せておいた。

ロビーのように広い部屋の中央に、大型テレビが一台設置されていた。その液晶画面には、津波の映像と破壊の様子が繰り返し、繰り返し、映し出されていた。テレビ局の報道員が悲鳴のような声を張り上げている。大きな、いや、史上空前かもしれない被害が出たらしいが、画面からでは実感が伴わない。ＳＦ映画を見ているような感覚でしかとらえられなかった。

気になるのは、画面の端に出て来る首都圏の交通情報だ。『山手線、総武線、常磐線、京浜東北線……運行見合わせ』という字幕。ＪＲばかりでなく私鉄も、地下鉄も、動いているものはひとつもない。

「ホテルも満員だろうし、今夜はここに泊りだな……」

増田社長がポツンと言った。

「上に行きましょう。二階にザコ寝する所がありますよ」

橋本君がみんなを促す。そこで一同、彼の言葉に従い自分の手荷物を持って階段を登った。登り切った所はロビーになっており、布張りの椅子やソファーが並んでいた。その奥には道場のような広間があった。床にはカーペットが敷いてある。たぶん、ここがザコ寝してもよい部屋なのだろう。そこには、すでに寝転んでいる人が何十人もいた。

私たちといっても、会社の人は社長を含めて五人しかいなかった。各自椅子やソファーに腰かけて、漫然と長い夜を過ごした。男性社員は、それぞれ友達の家とかに泊りに行くと言ってここを出て行った。最後まで付き添っていた橋本君も、九時前に、「じゃあ、僕はこれで」と頭を下げて避難所を出て行った。彼ら営業マンはつき合いが広く、友達も多いのだろう。

同じ所に長時間座りっぱなしだと腰が痛くなる。それでなくとも私はヘルニア持ちで、普段から腰痛に悩まされているのだ。

（下に降りて、お茶でも飲むか）

一階では、この寺のお坊さんたちが避難者たちにお握りとお茶を配っている。私も専務が買ってくれたお茶を持っていたが、ペットボトルではなんとも味気ない。温かいお湯で喉を潤したかった。

一階に降りると、まだ沢山の人がパイプ椅子に腰かけていた。テレビは相変わらず被害の様子と交通機関の運行見合わせを流していた。炊き出しコーナーには、ボランティアだろうか、お坊さんたちに交じってオバサンやオネエサンが何人か立ち働いていた。中には若い子もいる。私はそこに行って、青いジャージを着た少年から温かいお茶のはいった紙コップを受け取った。「ありがとう」と言って顔を上げた時、その子と目が合った。思わず「あっ！」と声を漏らすところだった。

（あの子だ！）

なんと、私が毎朝コーヒーショップから眺めている、あの女子中学生ではないか。そのボーイッシュな姿から少年と見間違えてしまったが……。

私たちが互いに見つめ合っていたのは、ほんのわずかだった。その子はすぐ目をそらすと、並んでいる客（？）たちにお茶を配り続けた。

私は紙コップの熱いお茶をちびちび舐めながら、少し離れた所からその様子を眺めていた。今の彼女はセーラー服を着ていないからか、

二、三歳年上に見える。それでも、その短いショートカットの髪、表情のないおもながの顔、スッと立った背筋は忘れようもない。

（間違いない……）

その子は、もう私の方を見ようとはしなかった。やがてお茶を配り終えた彼女は、渋茶色の盆を抱いて奥の部屋に消えて行った。

私は、これからみんなの所へ戻って、その憂鬱そうな顔を見るのもなんだか億劫になった。そこでそのまま外に出て、広い境内の中をぶらぶら歩いた。門の所から通りの方に目を向けると、そこにはまだ大勢の人が行きつ戻りつしていた。通りを挟んだ向かいの小学校には明々と電灯が点いており、いくつかの人影が見えた。あちらも非難所になっているのだろうか。

コンクリートの門柱に背を持たせて、それらの人々をぼんやり眺めていると、私のすぐ傍らを青いジャージの姿が通り過ぎた。

（あの子だ！）

「キミ、ちょっと！」

考えるより先に声をかけていた。

その子はちょっと立ち止まると、私に背を向けたまま「なんか用か」と答えた。まるで男のような低い声で。

声をかけたものの、次の言葉が見つからず私はあせった。取りあえず「さっきは、ありがとう」と言う。

「ありがとう……？　オレ、なにもしちゃいないよ」

その子はクルッと身体を回転させると、私の方に向き直った。

「あ、いや、その、さっきキミから、お茶をもらった」

私は意外な展開にあわてた。

「お茶ぐらい誰にだって出すさ。それよりあんた、どっかで見た顔だと思ったら、毎朝、喫茶店からオレを覗いている、あの変なオッサンだな」

彼女の顔が蛍光灯の光に青白く染まって、なんだか凄味を帯びているように見えた。

「いや、別に、あれはキミだけを見てるワケじゃない。学校へ行く生徒たちを眺めて、子供の頃は元気でいいなと、思っているだけさ……」

言い訳がましく、しどろもどろになった。

「ウソつけ！　このロリコンが。いいか、オレにはオジンの趣味はねえんだ。エンコーなら、ほかを当たりな」

彼女はさも軽蔑したようにフンと鼻を鳴らすと、薄暗い通りを交差点の方に向かって歩き始めた。

「おい、ちょっと待って！」

私は急いで追いつくと、いくらか荒い語調で彼女を呼び止めた。『ロ

リコン』とか『エンコー』とか言われて、いささかカチンと来ていた。
私は彼女の斜め後ろをセコセコ歩きながら、「それはキミの誤解だ」とか、「そんなつもりじゃ……」とか、言い訳がましくくどくど続けた。なにより彼女に軽蔑されたのがショックだった。（中学生のガキ相手に、いい年をした大人がなにを……）という気もしたが、誤解は解かなければならない。そのツンとした横顔を見つめながらしばらく続けていると、その子が急に立ち止った。勢い余ってドンと彼女の肩にぶつかる。
「いてえなあ……」
その子は肩をさすりながら「気をつけろよな」と顔をしかめた。それから私をジロジロ眺めると「オッサン、あんたケータイもってるか？」と聞いて来た。
「ケ、ケータイ？」
思いもよらない言葉に面食らってしまった。
「ケータイって、あれか。携帯電話？」
「ほかになにがあるよ。持っているんなら、ちょい貸してくれ」
彼女はもう手の平を前に差し出していた。
「えっ、キミは持ってないの？」
「オレの学校は禁止なんだ。ケータイがあると、男といちゃつくからダメなんだと」
「繋がらないぞ。さっきから、ずうっと家にかけてるがダメだ」
「でも、繋がる場合もあるそうだ。とにかく貸してくれ」
「どこに電話するんだ？」
（まさか、警察じゃあ……痴漢に襲われてまぁ～す……とか）
映画で見た痴漢冤罪の場面が頭に浮かんだ。普通、犯罪を立証するには、被害者が証拠を揃えなければならない。だが、痴漢の場合は、加害者と疑われた者が『自分はやっていない』という証拠を出さなければならないそうだ。『やってない』証拠なぞめったに揃えられるものではなく、ひとたび加害者と指摘されると、証拠もないのに、しょっ引かれることになる。中には示談金欲しさに、なんの関係もない男に近づいて、「この人、痴漢です！」と手を上げる女がいると聞く。なんでも女子中高生に多いとか。
（警察になら、こんな非常時にでもかかるかもしれない……）
ちゅうちょする私の態度を、彼女は不思議そうな顔で見ていた。
「オレの家に決まってるじゃないか。お寺のじゃ繋がらないんだ」
（家、家だって……）
私は改めてこの子の顔を見つめた。ショートカットの髪に白い頬、切れ長の眉、整った顔立ち。見れば見るほど美人、いやイケメンだ。

女の子にイケメンとはおかしな表現だが、この子の場合それが最もふさわしい。女の色艶が全く感じられないのだ。
「家って、キミんち、ここじゃないの？」
私はお寺を指差した。避難者にお茶をくばりながら、お坊さんたちとにこやかに話しをしていた姿を思い出した。彼らとは旧知の仲に見えたが。
「まさか。ここは今夜一泊の居候。なにかあったら、ここを頼るように言われているんだ。ここの偉いお坊さんと、オレの実の叔父貴とは遠縁なの」
「へーえ、そうなの。で、キミのお家はどこ？」
「浅草。電車が止まってるから帰れない。オッサンと同じ」
「学校は？　こんな時には先生もいるんでしょう」
「えーっ、やだよ。女ばっかしじゃん」
その言い方に思わず笑ってしまった。
「キミも女じゃ……」
言いかけたとたん拳骨が飛んで来た。当てる気はなかったとみえ、頬をかすめただけだったが。
「二度と女と言うな。今度は本気で殴るぞ。オレ空手やってんだ！」
彼女は目に怒りを込めて私を睨んだ。
「女じゃない……するとキミは……」
「そう、お察しの通りだよ。オレのここは、男のなんだ」
彼女（彼か？）は人差し指で自分のこめかみをつついた。
「おかげで、小学校の頃はずいぶんといじめられたもんだ。クラスのヤロウどもに……」
そして、なにかおぞましいことでも思い出したかのように顔を歪めた。
「そいで、学校に行けなくなっちまったんだ。足がすくんでどうしても玄関から出られないんだ。そしたら、親父と実の叔父貴が共謀して、女子校に押し込めやがった」
「その実の叔父さんという人は、キミのなんなんだ？」
この子が自分の叔父に『実の』とつけるのに引っかかった。
「ああ、『実の』といったら『実の』さ。血の繋がったという意味だろう普通。この学園の理事長なんだ。あいつ……」
彼（？）はなにやら複雑な顔をして言葉を濁した。
「理事長……キミの学校の？　それじゃあ、世田谷にあるあの女子大か？　時々テレビに出る飯島正美か？　あの人がキミの叔父さん？　するとキミの名前は飯島？」
私はやたらと（？）マークをつけて、詰問調で尋ねた。

「ああ、そのテレビの人物だよ。でも驚くこたぁない。オレの学校には、特に本校には、有名人のお嬢様がワンサカいるんだ。それにオレの名字は柳沢で、飯島じゃない」
彼（？）はイケメンの顔をわずかに傾けながら、こともなげにスラッと答えた。
「ふーん、なんだかワケありみたいだけど……上流階級ってぇのは、皆そうなのかい」
私は半分やっかみを含んだ言葉で尋ねた。
「みんなじゃないさ。オレの家庭は複雑なんだ。実の母親は尼僧をしてるし……。それに金持ちなのは叔父貴で、オレの親父は普通のサラリーマン」
彼（？）はため息をついて暗い空を眺めた。だが、すぐ私の方に目を移すと、「で、ケータイはいつ貸してくれるんだ」と思い出したように催促して来た。
私はズボンのポケットから、白い機器を取り出して渡した。彼（？）は慣れた手つきでしばらくいじっていたが、「やっぱりダメだ」と呟いて、それを私に返した。
「連絡、取れないのかい」
「ああ、あとは公衆電話だけか」
「公衆電話？」
「公衆電話は通じるらしい。なぜか分かんねえけど」
「公衆電話なら、この先の交差点にあるじゃないか。俺も行ってみるよ。家族に連絡取りたいし」
「家族いるの？」
「ああ、女房と娘が二人」
「娘って、オレぐらい？」
彼（？）は急に気をそそられたらしく、目を輝かせた。
「いや、二人とも大学を卒業した」
「なんだ、オバサンか」
思わず笑った。私の娘たちはまだ青春を謳歌しているようだが、中学生にとってはもう『オバサン』の部類らしい。
「柳沢クンはオバサン嫌いか？」
「嫌いじゃないけど……よく分かんない」
彼は（？）恥ずかしそうに肩をすぼめた。それから私を見て語気を強めた。
「その『柳沢クン』は、やめてくんねぇか。気色わりぃー」
「じゃあ、なんて呼べばいいんだい」
「シンだ。シンと呼んでくれ」

「シン……ただのシンか。漢字は？」
「シンでいい。それ以上知る必要ないだろう。明日はもうオレ、ここにいないんだから」
「えっ、いないって？」
私はうろたえた。
「卒業だ。今度の日曜は卒業式だよ。それまで学校はお休み。地震のせいで」
「卒業したら、どこか遠くに行くの？」
「本校。中学までは分校があちこちにあるが、高校は本校だけだから」
「本校はどこにあるの？」
「高尾」
「高尾……八王子の先？」
「ああ、全寮制だ。追いかけて来ても無駄だぜ。あそこは男子禁制なんだ。周りは高い塀に囲まれているから、絶対にはいれない」
この生意気にませた少女は、私の顔を下から眺めてニヤリと笑った。
「誰が……」
言い返そうとしたが言葉が続かなかった。もうこの子の姿を見ることはないのだ。せっかく友達（？）になれたのというのに……。
私たちは肩を並べて公衆電話のある交差点に向かった。この時私は黒い革ジャンを引っかけた若い男と、赤いセーターのもう一人が、人込みの中からこちらを見ているのに気づいたが、別段気にとめなかった。
「うわあ！」
思わず悲鳴を上げた。公衆電話の前は長蛇の列。これでは一時間、いや二時間はかかるかも知れない。うわさを聞きつけた人たちがわんさと集まって来たのだろう。
「ほかにもあるから、そっちに回ろう」
シン君の言葉に従い、公衆電話を探して歩いた。ところが、行けども、行けども、電話ボックスには多数の人が並んでいる。ついにうら寂しい公園の所までやって来た。そこに一台見つけた。幸運にも話している人は一人だけだった。その人が終わるとシンを先に使わせ、その後に私が使った。
すぐ女房が出た。彼女は勤め先から自転車を借りて、一時間かけて帰ったそうだ。二人の娘はもちろん自宅にいる。まずは一安心。だが、話中に目の端を黒い影がよぎった。眼球をそちらに回してみると、影は二つ。一人は黒い革ジャン、もう一人は真っ赤なセーター。
（あいつらだ！）
さっき私たちを見ていた男たちだ。年齢はシンと同じくらいか、そ

れより上か。二人はなにか獲物でも狙っているかのように、公園の奥に向かっていた。
（シンは？）
受話器に耳をつけたまま首を回して、彼らの行く方角に目を移すと、公園の隅を青い服がチラッとよぎった。男たちもまた、それを追うように生垣の裏に姿を消した。私はあわてて受話器を置くと、彼らの後を追った。
通りからはずれた場末の公園。ここには、散歩がてら何度か来たことがある。すぐ近くには名の知れた総合病院があり、昼間の天気のいい日などには、入院患者らしき人たちが綿入り袢纏などを着込んで日向ぼっこをしていた。
しかし夜は人気もなく、ぞっとするような寂しい所だ。公園の外灯もなぜか今夜は点いていない。あれだけ通りをたむろしていた人々も、ここまではやって来ない。
生垣の破れ目から覗くと、公園の隅に青いジャージのシンがいた。そのすぐ前に二人の男が立っている。シンの背後にはコンクリートの壁が連なって、もはや逃げ道はない。
「やっと会えたな、シン」
黒い革ジャンの男がニヤニヤ笑いながら、近づいて行く。
「なんだあ、幼馴染がわざわざ訪ねて来たというに、挨拶はナシか」
「久しぶりにカワサキに会って、声も出ないんだぜ。きっと」
もう一人がニタニタしながら言い添える。
「そうか、俺に会えてうれしいのか。じゃあ、たんとカワイがってやらんとなぁ」
二人はシンの左右から距離を詰める。シンは顔面蒼白。逃げようとしているらしいが、身体が畏縮して動けないようだ。さっき私に空手ができるのと、うそぶいていた元気はどこへやら。
「では、ヤルか」
先に手を出したのは赤いセーターの方だ。頭を丸刈りにして、サングラスをかけている。
「気をつけろ、タケ。コイツは見かけによらず……」
カワサキが言い終わらないうちに、シンはタケの手を払いのけ、その顔面に左ストレートを叩き込んだ。サングラスがふっとび、タケが仰向けに倒れる。顔面が割れて血が噴き出していた。
「おお、やるな、ワレ！」
カワサキが一歩退く。
シンはその隙に逃げようと、タケの身体を飛び越える。ところが、その足はタケの両手にがっちり握られていた。足を取られて地面に倒

れるシン。タケはシンの足首をつかんだまま起き上がると「コノヤロウ、やりやがったな！　半殺しにしてやるう――」と大声を上げてシンに殴りかかった。どうもタケというやつは切れやすいタイプらしい。
「おい、タケ、殴るな。あとは俺に任せろ！」
傍からカワサキが声をかける。
「だってよ、コイツは俺の顔を……」
「まあ、まあ、お前にはあとで存分にヤラせるからよ。ちょっと待ってろって。シンはまず俺からだ。お前はコイツが暴れないように、しっかり押さえてろ」
カワサキの命令にタケはしぶしぶシンの上から退くと、今度は彼女の両手首をつかみ、それを頭の上で交差させ、体重をかけて固定した。
カワサキはその様子を下卑た笑いで見ていたが、やおらシンにのしかかると、ジャージのズボンを脱がしにかかった。
（ここまでだな……）
私は生垣を抜けると、腹に力を込めて彼らの背後から近づいた。
「オイ！」
できるだけドスのきいた低い声で呼びかける。
シンを押さえつけていた男たちが跳ねるように立ち上がった。
「なにをしている！」
私は正面に立ちはだかった男を、激しい怒りを込めて睨みつけた。
（でかい！）
こいつがカワサキという男だろう。まだ大人の顔はしていないが、広い額に人を食ったような表情は、一目で相当なワルだと分かった。それに、そいつの体格は優に私を越えている。腕力ではとても敵いそうにない。
大体、私は小学校以来喧嘩というものをしたことがないのだ。武道も体育の授業以外で習ったことがない。これまでズゥーッと平和に生きて来た人種なのだ。こういう修羅場は生まれて初めてだ。私は、かつて見たヤクザ映画の抗争場面を思い出しながらカワサキと相対した。
そいつはちょっと驚いた顔をしたが、すぐバカにしたような表情に変わった。
「なんだあ、おめえ」
嘲るような声で私を威嚇する。
「なんだ、その言い方は！　ふざけるな！」
すかさず大声で怒鳴りつけた。
「さっさと、その子から離れんか！　サツを呼ぶぞ、サツを！」
私は全身に怒気をみなぎらせながら、これまで生涯に受けて来た恨みのすべてを、このカワサキという不良少年に叩きつけた。

（殴って来るかな……）
チラッとそういう思いが頭をかすめたが、ここで怯えてはだめだ。
私はカワサキの目を食い入るように睨みつけた。
しばらく誰も動かなかった。
瞬きもせず睨みつけていると、ふとカワサキが目をそらした。
（勝った！）
私はこの時、勝利を確信した。
カワサキは「おいタケ！」と、まだ間抜け面で突っ立っている相棒に声をかけた。
「行くぞ」
彼はズボンのポケットに両手を突っ込むと、背中を丸めて道路の方に歩き始めた。
「お、おい、カワ……コイツも一緒にやっちまえば、いいじゃねえか」
「バカ、大人と事を……まずいことに……」
彼はタケに一瞥をくれると、そのまま生垣の向こうに姿を消した。
それでもタケはちゅうちょしていたが、「畜生、おぼえてやがれ！」と捨て台詞を吐くと、カワサキのあとを追って行った。
「おい、帰るぞ」
私は目を丸くしているシンに声をかけると、彼らとは反対の方角に歩いて行った。
「オッサン、すげえ……」
彼（？）の感嘆した呟きが背後に聞こえた。

5

お寺に帰り着いた時には、時計の針が十時を少し回っていた。人生最大の戦いを経験したにしては、あまり時間が経っていない。私はシンを後ろに従えて避難所の玄関をはいった。そこには相変わらず大勢の人がパイプ椅子に腰かけ、テレビの画面を眺めていた。画面には繰り返し、繰り返し、津波の映像が流れ、運休している路線の白い字幕が途切れることなく続いていた。
二階に上がってみると、会社のＯＬ三人が退屈そうにソファーに腰かけていた。増田社長の姿は見えない。
「社長はどうしたのですか」
声をかけると、三人はのろのろと首を上げた。
「芝さん？　どこ行ってたの。社長はもうお休みよ」
渡辺さんが奥の大部屋を指差す。
そこはもう、倒れ込んだように横になっている人たちで、半分近く

が埋まっていた。
「ええ、ちょっと電話をしに……」
私は彼女たちと向かいの席に腰かけた。すると後ろに続いていたシンも私の隣に座る。そこで初めて彼女たちはシンが私の連れだと理解したようだ。さっそく仲間のリーダー格である永山さんが聞いて来た。
「ちょっと芝さん、その子どこで拾って来たのよ」
「ああ、この子。電話しに行く途中で……家に連絡が取りたいと言うものだから、公衆電話の所まで連れて行った」
チラッと隣に目をやると、シンがギロリと睨んでいた。（ウソばっかり）と言いたげな顔をして。
「へーえ、あなたも帰れないの？　おうちどこ？　高校生？」
彼女たちは彼（？）に興味をそそられたのか、代わる代わる質問を浴びせた。
「ちょっと、このオバ……いや、オネエサンたち、会社の人？」
シンが私の肘をつつく。
「あっ、オバサンって言いかけた」
永山さんが「このクソ坊主！」と、こぶしを振り上げる。
「くちワルーい」
「ホント、今時のガキは……」
三人の女たちは、突然転がり込んで来た美少年（？）を口々に非難した。
「まあ、まあ、まあ」
私は集中砲火を浴びて、いささかうろたえ気味のシンを助けるべく、彼女たちをなだめにかかった。
「この子、言葉遣いは悪いけど、なかなかしっかりしているよ。学校だって有名校だし」
「有名校……」
秋子さんがなにかを思いついたように、シンの青いジャージに目を留めた。そして「あーっ！」と声を上げる。
「なになに、どうしたの？」
残る二人が訝しげに彼女を見つめる。
「この子……もしかして、女？」
「えーっ！　うそー」
渡辺さんは仰け反り、永山さんは半分立ち上がって、その大きな目でシンの姿を眺め回した。
「ジャージの肩の所見て！　『M』の字よ。会社の近くにあるでしょう女子校が。あそこのよ。それにこの子の胸、胸見てごらん、胸！」
秋子さんは興奮してシンの胸を指差す。

「ふ、ふくらんでる。二つも！」
三人のオネエサンたちは、中腰になってシンの周りを囲んだ。
「芝さん、これ、どういうことよ！」
永山さんが私に非難の矛先を向ける。
「どうもこうも、この子とは会ったばかりですよ。さっきも言ったでしょう。家に帰れなくて困っていたから、連れて来たのですよ」
私は嘘八百を並べて、なんとか彼女たちを煙に巻こうとした。
「へーえ……」
みんなに、ジトーとした目で見つめられた。
「ちょっと、オバ、いや、オネエサンたち」
それまで黙って耐えていた（面白がっているようにも見えたが）シンが立ち上がって、オネエサンたちを制した。
「信じてあげなよ、半分は本当だからさ。それに、すげえよ。さっきオレ、チンピラ二人に絡まれて危なかったんだ。そしたらこのオッサンが一人でやって来てよ。やつらを一括したんだ。『ふざけるな！』って。相手はカワサキっていうオレと同じチューボーだけどよ、そんじょそこらの不良とはワケが違うんだ。真の悪魔だぜ、アイツ。そいつを頭から怒鳴りつけたんだ。その声がすごいのなんの。こっちだってビクッとしたぜ。ヤツもビビったんだろうよ、こそこそ逃げて行っちまったよ。ホント……胸がスカーッとした」
彼女（？）は、お嬢様とは思えない乱暴な言葉を連発しながら、両手のこぶしを固めてボクシングのポーズを取った。
「へーえ……」
彼女たちは驚きと疑いを併せ持った表情をして、改めて私に目を移した。
「さあ、もうおそいから私は寝るよ」
私は彼女たちから逃れるべく立ち上がって、奥の部屋にはいった。
「あっ、オレも」
一人にされては敵わないと思ったのか、すぐシンがついて来た。
私は、寝ている人の身体を踏まないように気をつけながら、一番奥の空いている場所に身体を横たえた。するとシンも私の隣にゴロンと転がった。
（おいおい、誤解されるじゃないか……）
ちょっと気が引けたが、悪い気はしなかった。いや正直かなりうれしかった。部屋の入口を振り返ると、そこには、こちらを窺うように覗いている三つの顔があった。
横になっても、硬いコンクリートにカーペットを敷いただけの寝床

では背中が痛くてよく寝つけない。隣のシンもさかんに寝がえりを打っている。私はさっき対峙したカワサキという不良のことが頭から離れなかった。

「なあ、あのカワサキっていうやつ、キミの同期だって本当か？」

私は、向こうを向いて横になっているシンに声をかけた。

「ああアイツか……。同級生だったんだ。小学五年の時……」

彼（？）は寝がえりを打って、こちらに顔を向けた。その顔が、なにか厭なことでも思い出したかのように歪んでいた。

（聞かなきゃよかった……）

カワサキとの間になにがあったか、おおむね想像がついた。

「オレはちっちゃい頃から、こんな風だったから、男の子にも女の子にも相手にされなかった。それで、いつもクラスの中で浮いていた。寂しかったんだ。そしたら、あの野郎が自分たちの仲間に入れてくれた。友達だとも言ってくれた。アイツは中学生みたいに身体がデカくって、喧嘩も強くて、みんなに恐れられていた。アイツの仲間にはいってから、みんなオレに一目置くようになった。他人に恐れられるってぇのは気持のいいもんでよ。それまでオレをいじめた子を、逆にいじめ返してやったりした。まさに虎の威を借るキツネだよな……」

シンは遠い昔を思い出したような目をしていた。十五歳にとって小学時代は遠い昔に当たるのだろう。

「ところがヤツは、最初からオレに目をつけていたんだ。仲間に引き入れたのもそのためだと後になって思い知った。ある日、講堂裏でヤツらになぶり者にされたんだ。ズボンを脱がされて、あそこに指を突っ込まれた。それをまたケータイに撮って、みんなに流しやがったんだ。その後、同じようなことをなんどもやられた。クラスのやつらは誰も助けてくれなかった。今日もアイツがいるかと思うと、足がすくんで外へ出られなくなった。親父もお袋も、なんでオレが学校に行かないのか理解できなかった。なんども仄めかしていたのに……」

なんということか、それはイジメなんてものじゃなく強姦だ。犬畜生と同じレベルの最も卑劣な行為だ。現代では、このような犯罪同様のことが、小学校にまで広がっていると聞く。やられた者は周りの者には無視され、親や先生には言えない。また訴えたところで、なんの解決にもならない。結局登校拒否になるか、幼くして死を選ぶか……。

「そこに実の叔父貴というのが現れてよ。このままではダメだからって、自分の経営する小学校に転校させたんだ。それが今通っているガッコの付属。それから先は、さっきオッサンに話した通り」

「でも、なんでカワサキがここにいるんだ。キミの家は浅草だろう」

私はふと疑問に思ったので尋ねてみた。

「ああ、あいつは執念深い。時々出張して来るんだ。オレが一人になるのをじっと狙っている。陰険で危険なヤツだ。一緒にいたタケとは比べものにならねえ。タケはすぐキレるが、頭は単純。バカで騙されやすい。あいつにくっついていなけりゃあ、気のいい男なのに」

シンはそこまで話すと、寝返りを打って首をコトンと床に着けた。それっきり話しかけてこない。不審に思った私は半身を起して彼（？）の顔を覗き込んだ。するとそこには「くう〜っ、くう〜っ」と気持よさそうに寝入っている、あどけない少女の顔があった。

6

私が目を覚ました時には、横になっている人はあまりいなかった。寝ぼけまなこでゴソゴソやっているか。手荷物を抱えてふらふら外に向かっているか。どうやら朝になったようだ。

（シンは……）

隣を見ると、そこには人ひとり分の空間があった。

（もう行ったのか……）

立ち上がって出口に向かっていると、キャンキャンと甲高い女の声が聞こえた。

（なんだ？）

ロビーを覗いてみると、白いジャージの小柄な子が文字通りキャンキャン吼えたてている。吼えられているのは、昨夜私が添い寝（？）をしていたシンだった。

「シン、どうして抜け出したのよ。みんな心配しているよ」

長い髪をツインテールにまとめた少女はぷりぷり怒っていた。どこかで見た顔だと思ったら、よくシンと一緒に登校して来るソバカスの子だった。

「だって、あそこは女ばっかりじゃん。女の臭いがプンプンするじゃん。オレあんな所じゃ眠れないよ。いくら寝袋があってもさ」

シンはタジタジになって弁解している。

「だからって、あたしに黙って行くことないじゃない。見損なったわ。友達だと思っていたのに！」

「なにもそう怒ることないじゃん。オレ、いつだってユキの友達だよ。学校を出る時、一応おまえを探したんだよ。でも見つからなくってさあ……」

「ふん、一応……なのね」

ユキと呼ばれた子は、プン！　と、そっぽを向いた。シンは弱ったように頭を掻いている。

その様子を会社のオネエサマ方がクスクス笑っている。彼女たちは昨夜寝なかったのか赤い目をして、まだソファーに座り続けていた。私が顔を出すと、お互いに目配せして意味ありげな顔をした。

「芝さん、助けてあげなよ。お姫様が困っているよ」

さっそく永山さんが、からかうように声をかけて来た。

「まあ、まあ、まあ、まあ」

私はしかたなく仲裁にはいった。

「お嬢ちゃんの気持もわかるけどさ、シン君の気持も考えてくれないかなあ。ここは彼（？）の家みたいなものだから……」

するとそのお嬢ちゃん、驚いたように私を見上げると、「なっ、なっ、なっ」と意味不明の声を発した。そしてシン君の袖を引っ張ると、「なに、このおじさん」と額に皺をよせた。

「ああ、このオッサン。白馬の王子様だよ。多少老けてるけどな。昨夜オレを助けてくれた。あのカワサキから」

それを聞くとユキちゃんの顔色がサッと変わった。

「カ、カ、カ」と再び意味不明の声を発してから、「カワサキ！」と怯えたように叫んだ。

「だから言ったじゃない。一人で出歩くなって！　あん畜生は悪魔でも平気で殺すやつなんだからね。以後気をつけてよね。外に出る時は必ずあたしか、メンバーに言うのよ。さあもうここに用はないでしょう。帰るわよ、学校に」

「ああ、ああ、分かった、分かった。今、着替えて来るよ。玄関で待っていてくれないか」

シンは逃れるように、あたふたと突き当たりの扉を開けて、別の部屋にはいって行った。後に残されたユキちゃんはギロリと私を一睨みすると、仏頂面で階段を下りて行った。

傍から一部始終を見ていたオネエサマ方は「ああ、おもしろかった」と、互いに笑い合っていた。

そこに社長が一階から上がって来た。

「電車が動き出したそうだ。さあ、みんな、そろそろ家に帰ろうか。今日、会社は休みにするよ」

彼の言葉に、みんな手荷物（ほんの、わずかだが）をまとめる。そして、いざ階段を下りようとしたところで、奥のドアが開き、紺のバッグを提げた黒いセーラー服の少女が現れた。

彼女の背はすらりと高く、肌は透き通るように白い。小作りの顔にはショートカットの前髪がハラリとかかり、誰が見ても美人、いや中性的雰囲気を漂わせた美少女だ。

「シンか……？」

私は口をあんぐり開けて、その美少女を見つめた。毎朝店の窓から眺めているとはいえ、こんなに近くからそのセーラー服姿を見るのは初めてだ。三人のオネエサマ方もあっけにとられた様子で、彼女の周りに集まって来た。

「おお、オレよ。オレ以外の誰だってんだ。オッサン、目でも悪くなったか」

少女は乱暴な言葉を吐くと、片手にバッグを提げ、オネエサンたちを掻き分けて一階に下りて行った。その後ろ姿がなんだか寂しそうにも見えた。

（ヤツが執着するはずだ……）

三人のオネエサマ方も納得したのか、互いに顔を見合わせてうなずいていた。

シンの後から五人がゾロゾロ階段を下りて玄関を出て見ると、そこには十数人の少女たちが誰かを出迎えるように立ち並んでいた。そこには一足先に出て行ったユキちゃんもいる。（少女たち）と思ったのは、彼女たちの顔がいくぶん幼く見えたからだ。服装はジャージあり、トレーニングウエアあり、セーラー服ありとまちまちだったが、私は彼女たちに見覚えがあった。なんと、毎朝シンを取り巻いて登校して来る女生徒たちではないか。

彼女たちはシンの姿を認めると「わーっ」とか「きゃー」とかの奇声を発した。シンは「よお」と片手を上げて彼女たちの中にはいって行く。彼女たちはシンを囲んで「シンさま、大丈夫でしたか～」とか、「柳沢センパ～イ、よくご無事で～」とかの声をかけている。

「これ、なんだい？」

私は傍に立っているユキちゃんにコソッと尋ねた。

「シンのファンクラブよ。柳沢ガールズって呼ばれているわ」

彼女は、おもしろくなさそうにブスッとした顔で答えた。

「へええ、これは……王子様みたいだね、カレ」

私が感嘆して見ていると、白い道衣に黒袴の少年（？）が前に進み出て、「先輩、水臭いじゃありませんか、我々を置いて一人で外出するなんて。それに、あのカワサキと戦われたとか。惜しい！　自分がその場にいたら、叩きのめしてやったものを」と肩に担いでいた竹刀袋から一振りの木刀を取り出すや、その黒光りのする剣先を天に突き上げ、「ヤーッ！」と気勢をあげた。すると周りの子も「おおっ！」と、こぶしを振り上げる。

「す、すごい！　これ、女子中生……」

「あたり前よ。あたしたちは、来るべき戦いに備えて毎日修練してるのよ」

「修練？　それに戦いって？　誰と戦うの？」
「男よ、もちろん！」
ユキちゃんはビシッ！　と私の顔に指を突き出した。
「いい、この世は、あんたたち男がいるから不幸になるの。男は愚劣で、卑怯で、疑い深くて、やたらと人を殺すわ」
彼女は、ありとあらゆる男の悪癖を並べ立てると、「この地球から男という種がいなくなったら、どんなに平和になることでしょう……」と長嘆息した。
「まあ、それもそうだね」
ユキちゃんに気圧されて思わず相槌を打った。
「そうでしょう！」
彼女はパッと顔を輝かせた。
「オッサン……いや、おじさん、なかなか話が分かるじゃない。どうお、あたしたちの仲間にならない。本来は敵だけど、そんな男の中にも、協力してくれるシンパが欲しいと思っていたとこなの。おじさんになら、事が成った暁には市民の身分を残してあげてもいいわよ」
ユキちゃんは誇らしそうに胸を反らした。
「それは、どうも。その時はよろしく頼むよ」
私は、そのかわいらしい胸のふくらみを目に入れながら、丁寧に頭を下げた。ふと後ろを振り返ると、そこには満面吹き出しそうになっている三人のオネエサマ方がいた。
「おい、ユキ。いつまでしゃべっているんだ。もう行くぞ！」
女生徒たちの中からシンの声がした。ユキちゃんは、あわててその輪にはいる。
「オッサン、ありがと。生きてたら、またどこかで会うかもな」
シンは私に片手を上げると、柳沢ガールズを引き連れてお寺の門を出て行った。
「芝さん、ついて行ったら。仲間に入れてくれるって」
中山さんの言葉に女性たちの笑い声が境内に響いた。笑い上戸の秋子さんなんか、「おほ、ほーほほほ！」と身体を『く』の字に曲げて笑いこけている。一人増田社長だけが、訳が分からず取り残されたような顔をしていた。

7

五月にはいると事務所の中は閑散として来た。先月まで残っていた三人の男性社員は、もうよその会社に転職していた。今いるのは社長を含めて五人。いずれも非難所で一夜を明かした仲間だ。しかし、そ

れも今月でおしまい。会社はすべての活動を終了し、社長一人が親会社の持っている墨田区のビルに居候して残務整理に当たることになる。三人のオネエサンたちは今月末で退職する。新しい勤め先はまだ決まっていないらしい。

（一年、もたなかったか……）

私は憂鬱な思いに駆られながら、残っている人たちと清算業務を行った。書類の整理、電話やインターネットの解約、退職金の計算、役所への届け出と、やることは山ほどあるのに、なんとも気が進まない。渡辺さん、中山さん、水村さんはとても有能だ。のろのろとしている私の代わりに、煩雑な事務手続きを根気よくこなしてくれた。彼女たちのおかげで、なんとか閉鎖期限の今週末までに片付きそうだ。転職した男性社員はこの近くの会社にいるらしいが、手伝いに来ることもなかった。

この会社にはいってまだ半年しかたっていないのに、もう何年もいたような寂しさを覚えた。三十三年も務めたのに最後まで馴染めなかった前の会社に比べると、ここはとても私に合っていたようだ。

私は毎朝欠かさず、例の喫茶店でコーヒーを一杯飲んでから、会社に向かった。街の歩道は薄い夏用セーラー服の女生徒達であふれていたが、その中にシンやユキちゃんの姿はなかった。

今日は五月最後の金曜日、みんなとは今日でお別れだ。私は明日も出て来るが、それは荷物を引き取りに来る業者を待つだけで、実質の仕事は今日で終わる。最後の日だというのに、とても忙しかった。社長は朝から挨拶回り。私は三人の女性と後片付けに没頭した。

終わったのは夜の八時、社長も帰って来て、簡単にお別れの杯を酌み交わした。それから自分たちの手荷物を持って会社を出た。しばらく五人そろって築地の街を歩いた。だが、やがて、みんなそれぞれの駅の方に散って行った。もう会うこともないだろう……。

翌日は、午前中に荷物の搬出が終わった。私は事務所の中をひと通り掃除してから、十数個あったゴミ袋を地下のゴミ置き場に捨てに行った。それから自分の慣れ親しんだ席に座り、カバンから手帳を取り出した。そして、これまでに記帳したメモを見ながら、この会社に入社してからのいろいろな事を振り返った。

いつまでもそうしていたかったが、腕時計を見ると、もう四時半。私はのろのろと立ち上がって、窓のブラインドを閉めた。最後のブラインドを閉める時、これも見慣れた東京スカイツリーが夕日を浴びて鮮やかに染まっていた。まるで「さようなら」とでも言うように……。

それから、事務所のドアを閉め、鍵をかけてビルの外に出た。
築地の街は相変わらず人々が行き交い、海産物などを買いあさっていた。東京湾から吹いて来る風が、初夏の暖かい風を運んでいる。私は周囲の建物を見回しながら東銀座の駅に向った。なんとなく離れがたい思いがこみ上げて来て、思わず目頭を押さえた。
もう私がここに来ることはないのだ。渡辺さん、中山さん、水村さん。それに、シンやユキちゃん。もう彼女たちと会うことはないだろう。

さようなら、私が過ごした会社
さようなら、私が出会った人たち
さようなら、私が生きた街

（了）

（この物語はフィックションです。登場する個人、団体、自治体等は、現実の個人、団体、自治体等とは一切関係ありません）

「印旛文学の会」会員と連絡先

唐瀬（からせ）　光（こう）　印西市在住
メール　karasekou@live.jp
中川とら　印西市在住
メール　nakagawatora1@gmail.com
香取（かとり）　淳（じゅん）　印西市在住
メール　katorijun27@gmail.com

この秋に右の三名で、文芸「草の丘」を立ち上げました。
小説や詩、随筆等を書くことが好きな人を募集しておりますので、どなたでもお気軽にご連絡ください。

【編集後記】

同人誌が衰退していく時代の潮流に反して、文芸「草の丘」を創刊することになりました。かつては月刊誌「文学界」に同人誌評が連載され、全国各地で発行された同人誌の中から、すぐれた作品が選ばれ批評されてきました。その同人誌評も「文学界」から消え、幾つもの同人誌が廃刊に追い込まれているようです。

なぜ、同人誌が衰退してゆくのか、その第一の理由は「活字離れの文化」にあると思われます。しかし、紙からディスプレイ、文字からアニメなどに表現する媒体や形式が変わったとしても、人が自らの意思や感情、感動などを他者に伝えたい、逆にそれらを探し求めて共感したり反発をしたりして楽しみたい… という人間本来の願望は何ら変わるものではないでしょう。

同人誌が衰退する第二の理由は「高い出版費用」にあると思われます。筆者は、四半世紀ものあいだ同人雑誌に小説を掲載してきましたが、その費用は膨大な金額になります。年金暮らしの身となった今では、それらを負担することは不可能なことです。デフレの時代で、誰もが収入減に悩んでいる昨今では、出版にかかる多額の費用は同人誌の継続を困難にしている要因の一つでしょう。

私たちはそのような観点から、文芸「草の丘」の主体を文字媒体にはこだわらないウェブサイトに置くことにしました。この文芸誌に関心のある方は、コンテンツをパソコンやスマートフォン等で読むことができますし、活字を好まれる方はウェブサイトから紙に印刷することもできます。

このようなやり方で、私たちは文芸「草の丘」を発刊することになりましたが、時代の流れに即した「印旛文学の会」に賛同し、詩や随筆、小説などを寄稿してくださる仲間を募集しています。

そして、一人でも多くの方に掲載作品が読まれることを祈念しつつ、豊かな草木に囲まれた印旛の地から、創刊号を送り出します。

〈香取　記〉

草の丘　創刊号

発行　二〇一一年十一月二十一日

編集兼発行人　印旛文学の会　香取　淳

連絡先メール katorijun27@gmail.com

携帯　so3_higul@ezweb.ne.jp

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp